

博多遺跡群第3次調査

—万行寺納骨堂建設にともなう発掘調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第515集



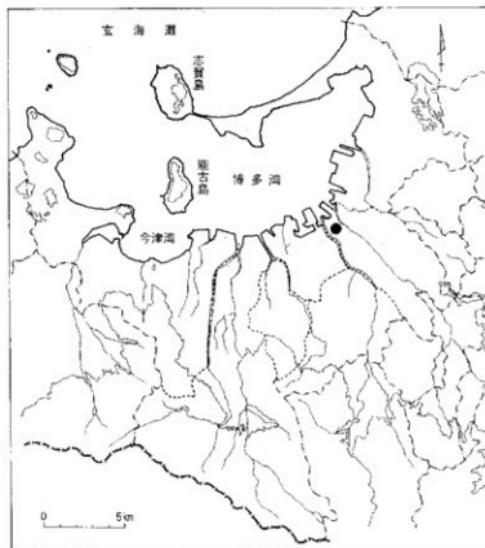
1 9 9 7

福岡市教育委員会
万行寺遺跡調査会

博多遺跡群第3次調査

— 万行寺納骨堂建設にともなう発掘調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第515集



遺跡略号：7929
調査番号：HKT

1997

福岡市教育委員会
万行寺遺跡調査会



褐釉四耳壺（SK02出土）



博多遺跡群第3次調査SK-02出土遺物

序

古来より大陸文化流入の門戸であった博多は、現在もアジアの情報が集中する九州の中核都市として発展を続けています。このような発展によって、市内各所での開発行為は非常に活発であり、これによって失われる埋蔵文化財は数知れないものがあります。

福岡市教育委員会では、このような共同住宅、商業ビルなどの開発によって失われる数々の遺跡を調査し、記録の保存を図っています。

本書に掲載された博多遺跡群の第3次調査は、博多の古刹万行寺の納骨堂建設のために昭和54年度に緊急発掘調査を行ったもので、調査終了から長い年月を経てようやく刊行の運びとなりました。

つきましては、本報告書が市民の方々の市内遺跡を通じた福岡市史の理解の一助となり、また、学術書としても有効に活用いただければ幸甚に存じます。

なお、刊行にあたりまして諸々のご協力をいただいた関係者各位に対して深く感謝をもうしあげます。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 俊

例　　言

1. 本書は、万行寺納骨堂建設にともなって発掘調査を実施した福岡市博多区祇園町所在の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和54年11月上旬から12月中旬まで実施した。
3. 発掘調査で検出した遺構は、溝状遺構を S D 、土坑を S K 、墳墓 S X 、整穴住居跡 S C 、柱穴を S P と表記した。
4. 本書に使用した遺構実測図の作成は、調査担当者の柳沢一男、横山邦継で行った。また、遺物の実測は、横山のほかに本課田上勇一郎、整理調査員の森本朝子氏の強力な応援を得た。
5. 本書に使用した図面類の整図および製図は、横山が行った。
6. 本書に使用した写真的撮影は、遺構を柳沢が、遺物を横山が行った。
7. 本書の執筆・編集は、横山が行った。
8. 本書で使用した方位はすべて磁北である。
9. 本書に関する調査記録類、出土遺物は、平成9年度に埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

本文目次

| | | |
|-----|----------------------------------|----|
| 第一章 | はじめに | 1 |
| | 1. 調査に至る経過 | 1 |
| | 2. 調査の組織 | 1 |
| 第二章 | 遺跡の立地と環境 | 3 |
| 第三章 | 調査の記録 | 4 |
| | 1. 調査概要 | 4 |
| | 2. 検出遺構 | 5 |
| | ① 上面検出の遺構 | 5 |
| | ・上坑 (S K01,02,03,04,06) | 5 |
| | ・溝 (S D01,03) | 17 |
| | ② 下面検出の遺構 | 30 |
| | ・土坑 (S K05,07,08,09,10,11) | 30 |
| | ・溝 (S D02,04,05,06) | 34 |
| | ・墳墓 (S X01) | 37 |
| | ・住居跡 (S C01) | 38 |
| | ・柱穴 (S P) | 40 |
| | ・表土層出土遺物 | 40 |
| 第四章 | おわりに | 41 |

図版目次

| | | |
|---------|---|--|
| P L. 1 | 1. 上面遺構検出状況 (南より) 2. 上面遺構検出状況 (南より、一部に基盤白色砂層露出) | |
| P L. 2 | 1. 上面遺構検出状況 (南より) 2. 上面遺構検出状況 (南より、白色は、S D01の北壁) | |
| P L. 3 | 1. 上面遺構検出状況 (西より) 2. 上面遺構検出状況 (東より) | |
| P L. 4 | 1. S D01西側土層断面 (東より) 2. 上面 S D01内作業風景 (南より) | |
| P L. 5 | 1. 下面遺構検出状況 (南より) 2. 下面遺構全景 (西より) | |
| P L. 6 | 1. S D01検出状況 (東より) 2. S D01土層堆積状況 (東より) | |
| P L. 7 | 1. 調査区北壁西側土層断面 (南より) 2. 調査区北壁東側土層断面 (南より) | |
| P L. 8 | 1. 溝査区下面遺構検出状況 (東より) 2. S K05出土状況 (東より) | |
| P L. 9 | 1. S K03,04出土状況 (北より) 2. S K04出土状況 (西より) | |
| P L. 10 | 1. S K05,08,09出土状況 (北より) 2. S K04出土状況 (東より) | |
| P L. 11 | 1. S X01(下面)出土状況 (西より) 2. S X01内人骨遺存状況 (北より) | |
| P L. 12 | 1. S K09出土状況 (南より) 2. S K09馬齒出土状況 (東より) | |
| P L. 13 | S K02土師皿出土状況 | |
| P L. 14 | 博多遺跡群第3次調査出土遺物① | |
| P L. 15 | 博多遺跡群第3次調査出土遺物② | |

挿図目次

| | |
|--------------------------------------|----|
| Fig. 1 博多遺跡群位置図(1/4000) | 2 |
| Fig. 2 博多遺跡群第3次調査周辺調査図(1/400) | 4 |
| Fig. 3 調査区北壁土層断面図(1/80) | 5 |
| Fig. 4 第3次調査区全体図①(上面、1/100) | 6 |
| Fig. 5 S K01出土状況実測図(1/20) | 7 |
| Fig. 6 S K01出土遺物実測図(1/3) | 7 |
| Fig. 7 S K02出土状況実測図(1/20) | 8 |
| Fig. 8 S K02出土遺物実測図①(1/3) | 10 |
| Fig. 9 S K02出土遺物実測図②(1/3, 1/4) | 11 |
| Fig.10 S K03出土状況実測図(1/20) | 13 |
| Fig.11 S K03出土遺物実測図(1/3) | 14 |
| Fig.12 S K04出土状況実測図(1/20) | 15 |
| Fig.13 S K04出土遺物実測図(1/3) | 15 |
| Fig.14 S K06出土状況実測図(1/20) | 16 |
| Fig.15 S K06出土遺物実測図(1/3) | 17 |
| Fig.16 S D01西壁土層断面実測図(1/80) | 17 |
| Fig.17 S D01第1層出土遺物実測図①(1/3) | 19 |
| Fig.18 S D01第1層出土遺物実測図②(1/3) | 21 |
| Fig.19 S D01第1層出土遺物実測図③(1/3) | 24 |
| Fig.20 S D01第1層出土遺物実測図④(1/3) | 26 |
| Fig.21 S D01第4・5層出土遺物実測図(1/3) | 27 |
| Fig.22 第3次調査区全体図②(下面、1/100) | 28 |
| Fig.23 S K05出土状況実測図(1/20) | 29 |
| Fig.24 S K05出土遺物実測図(1/3) | 30 |
| Fig.25 S K07出土状況実測図(1/20) | 31 |
| Fig.26 S K08出土状況実測図(1/20) | 31 |
| Fig.27 S K09出土状況実測図(1/20) | 32 |
| Fig.28 S K09出土遺物実測図(1/3) | 32 |
| Fig.29 S K10出土状況実測図(1/20) | 33 |
| Fig.30 S K10出土遺物実測図(1/3) | 33 |
| Fig.31 S K11出土状況実測図(1/20) | 34 |
| Fig.32 S D02出土遺物実測図(1/3) | 35 |
| Fig.33 S D04,05出土遺物実測図(1/3) | 36 |
| Fig.34 S D06出土遺物実測図(1/3) | 37 |
| Fig.35 S X01出土状況実測図(1/20) | 38 |
| Fig.36 S C01出土状況実測図(1/20) | 39 |
| Fig.37 S C01出土遺物実測図(1/3) | 40 |
| Fig.38 表土層出土遺物実測図(1/3) | 41 |

第一章　はじめに

1. 調査に至る経過

昭和54年6月9日付けで、宗教法人万行寺より博多区祇園町地内の境内地内に納骨堂建設の計画が出され、開発の事前審査受付後の9月25日に対象地の試掘調査を行った。

試掘調査の結果、現地表より地下約1mのところに溝、井戸、土坑など中世末ころの生活遺構が見つかり、更に深部にはこれを遡る時期の遺構が想定された。

このため受付窓口では、原因者である万行寺住職 七里宗順氏と納骨堂を建設することによって失われる埋蔵文化財の処置に関して協議をすすめた。

協議では、納骨堂の建設に伴う基礎工事については当初計画を変更できるか否かが課題となつたが、変更是困難との結論に達し、記録保存を前提にした本調査を実施することとなつた。

本調査は、同年11月12日より開始して、12月17日に無事終了したが、現地が博多部特有の砂地であったため、壁面崩壊のため遺構の検出作業や掘り下げには危険が伴い、また遺構の埋上が砂のため通常の場合よりも調査に伴う堆土量が多くなり、箇場に困る状態にあった。

しかしながら、原因者である七里氏などの非常な協力を得てこれらの状況は克服された。

2. 調査の組織

調査委託 宗教法人 万行寺

調査主体 万行寺遺跡調査会

調査総括 文化課長 井上剛紀、文化財第2係長 柳田純孝

庶務担当 岡島洋一

調査担当 柳沢一男、横山邦継

整理担当 土斐崎つや子、小森佐和子、安野 良、岡田則子

| 遺構名 | 遺跡調査番号 | 遺跡番号 | 調査地所在 | 分布地区番号 | 調査対象面積(㎡) | 調査面積(㎡) | 調査期間 | 調査担当者 |
|------------------------|--------|------|----------|--------------|-----------|---------|--------------------|--------------|
| 博多 遺跡群 第3次 調査 | 7929 | HKT | 博多区祇園町地内 | 天神49 0121 | 240 | 240 | 79.11.12 ～12.17 | 柳沢一男 横山邦継 |

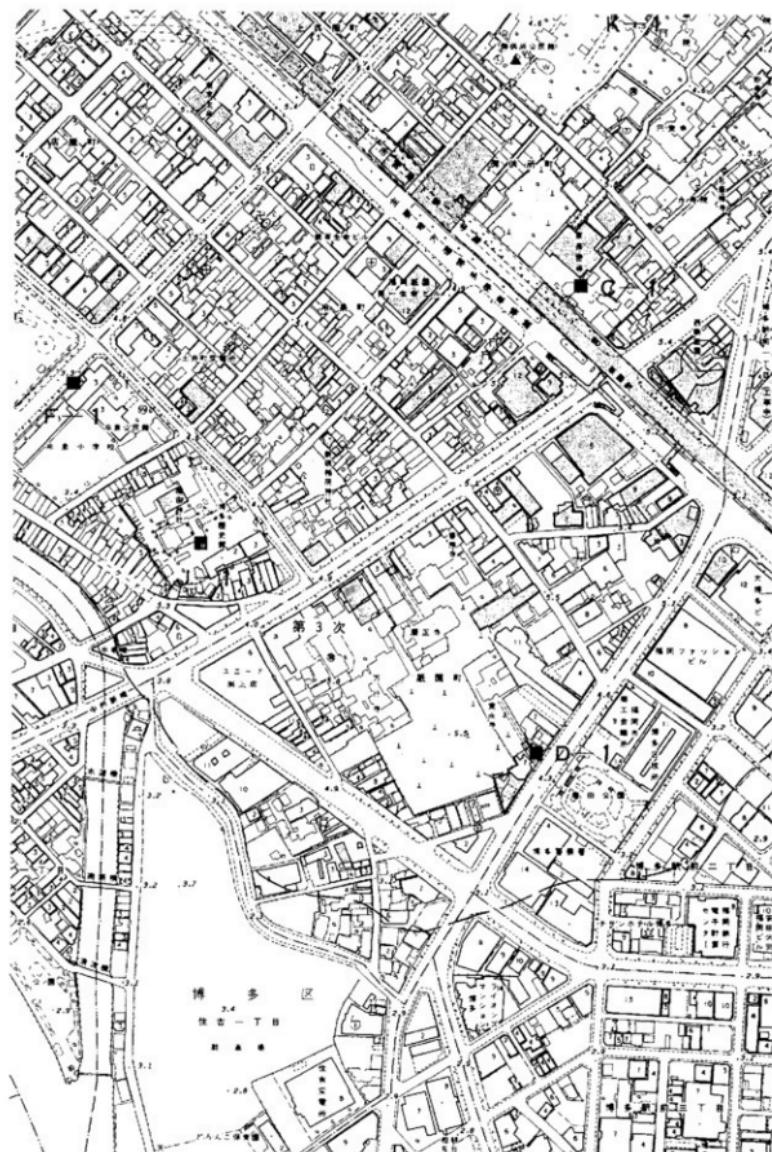


Fig. 1 博多遺跡群位置図 (1/4,000)

第二章 遺跡の立地と環境

博多遺跡群は、福岡平野を南北に貫いて博多湾に注ぐ那珂川、御笠川の河口付近に形成された砂丘上に立地する。更に厳密にその範囲を考えると、西側を那珂川(博多川)、東側を江戸時代に調整された石堂川、南側を石堂川開鑿以前は東から那珂川に流れていた旧比恵川の流路によって画される部分といえる。

遺跡群の砂丘は、大きく現在の呉服町付近を鞍部として南北の砂丘に区別される。遺跡の形成は、南側の砂丘が先んじており、統いて北側砂丘へと及ぶようである。砂丘は現在の博多駅から博多湾に向かう大博通りに当たる部分が地形的に最も高く(標高6m前後)、各時代の町の形成もこの付近を中心とした。

ところでこの博多遺跡群が、実際に遺跡として認識されるようになったきっかけは、1977年の福岡市営地下鉄の祇園町工区にともなう緊急調査であるが、この後道路等の公共的事業に伴う調査のみならず、民間事業におけるビル建設等の大小開発について試行錯誤を繰り返しながら調査を行ってきた結果、博多遺跡群が弥生時代から現在まで、時代の上では実に間断なく引き続いている大規模遺跡であることが明らかとなってきた。

博多遺跡群では、弥生時代初めの遺物も出土しているが、本格的には中期前半の頃の豊穴住居、甕棺墓が検出されており、この時期に始まる。更に、古墳時代では住居跡や方形周溝墓などの墳墓も検出されるとともに第28次調査では砂丘上に埴輪等を伴う博多1号墳のような前方後円墳が出現しており、他の地域と同列的に発展していたことが判る。

歴史時代には、現在の平和台球場付近におかれた太宰府鴻臚館の稼働に基づいて博多遺跡群内にも関連施設の建設がなされたが、鴻臚館の本来もっていた外国使節等の接遇などの機能が時間とともに変化するなかで、博多は貿易都市として次第にその姿を明らかに確立して行くのである。

中世博多の繁栄は、まさにこの時代の南宋との貿易によってもたらされたものであったが、中世末から戦国にかけては博多の利権をめぐって様々な攻防が繰り返された。この混乱に終止符をうったのは戦乱によって消失した博多の町の区画整理を実施した豊臣秀吉であったであろう。

大間町割りと呼ばれるこの事業は、その後の博多の町の基本形となり、現代まで引き続いているのである。

このような長い歴史をもつ博多は、振り返って見れば古代から破壊と建設の繰り返しであったことに思い至るのであるが、現代の建設のすさまじさはその内容と共にスピードの点において、過去の開発とは決定的に異なっている。現在の建設は将来にわたってこの地域の文化となりうるかはよく判らない。

ともかくも、約2000年間蓄積してきたこの博多の文化、文化財の保存を現代に生きる我々がどのように位置づけ、対応を選択していくかが常に求められているのは確かなことである。



Fig. 2 博多遺跡群第3次調査周辺調査図 (1/400)

第三章 調査の記録

1. 調査概要

第3次調査は、表土の搅乱層を約1mほど掘削した後、遺構の検出にあたった。

そしてこのレベルを遺構面と考えて平面的に精査したが、近世以降と考えられる井戸などが散発的に検出されるのみで、明確なものがなかったため更に入力による掘り下げを50cmほど行い、土坑などを検出したため、この面を文化層の上面と考えた。標高は、海拔約4mほどで、地表下1.5mにあたる。上面の主要な検出遺構は、土坑5基（SK01,02,03,04,06）、溝1条（SD01）である。

また、この上面よりさらに30~40cmほど下げた面が下面であり、都合2面のみを確認した。

下面では、土坑6基（SK05,07,08,09,10,11）、溝5条（SD02,03,04,05,06）、墳墓1基（SX01）、竪穴住居跡1棟（SC01）が検出された。

2. 検出遺構

① 上面検出の遺構

・土坑

S K 01 (Fig. 5, 6) 調査区西側に検出された小土坑で、原形の約半分が調査された。規模は、長辺が1.8m、短辺が0.7m以上をかる。埋土より青磁器碗、白磁器碗などが出土した。

出土遺物 (Fig. 6) 00085は、小振りの青磁器碗である。釉は、黄オリーブ色を呈し、全体不均一に掛かる。

胎土は、ベージュで細かい。黒点が少々混ざる。小孔あり。口径9.2cm、底径2.5cm程度か。連江窯系青磁器か。

00086は、白磁器碗である。内湾気味に外方に開く口縁を有する。釉は、黄オリーブを含む透明な釉で、器面に細かい氷裂あり。胎土は、灰色味の黄白色で、やや粗である。口径16.2cm、底径5.8cm、高さ5.75cmを測る。白磁碗Ⅱ類。

S K 02 (Fig. 7, 8, 9) 調査区東北隅で検出された大型土坑で、長円形をなす。規模は、長辺長2.6m、短辺長1.8m、深さ0.9m以上を測る。

埋土から、青磁器碗、同皿、白磁器碗、同皿、国産陶器、中国産陶器、染付皿などがまとまって出土している。

出土遺物 (Fig. 6, 7) 00001は、越州窯系青磁器碗である。直線的に外方に開く体部を有する。高台疊付きに白色の目跡、また内底部に黄白色の細かい耐火土の目跡がある。

00012は、青磁器碗である。釉は、やや黄味の灰褐色。半透明で、よく溶けて光沢がある。胎土は、薄い灰色を呈し、熔融しており、小孔あり。内面見込に「河濱遺範」の印文あり。また、外底部にも墨書があるが字の内容は不明である。底径5.6cmを測る。龍泉窯青磁碗Ⅰ類。

00013も龍泉窯青磁碗Ⅰ類である。内面体部にヘラ描きの草花文を施す。また、内底部も同様である。釉は、黄オリーブ色の半透明釉であり、全体に厚く掛かる。釉の厚く溜ったところでは気泡が入り、不透明となっている。氷裂あり。胎の色を反映して灰褐色に見える。焼成の最後の段階で酸化炎をうけている。胎土は、茶褐色で混じりなし。磁化している。口径17.9cm、底径5.8cm、高さ6.4cmを測る。

00014は、やはり龍泉窯青磁碗Ⅰ類で、口縁部を欠く。釉は、オリーブ味の灰色の半透明釉を掛ける。氷裂は見られない。また、胎土は、暗灰~茶褐色で混じりはない。磁化している。内

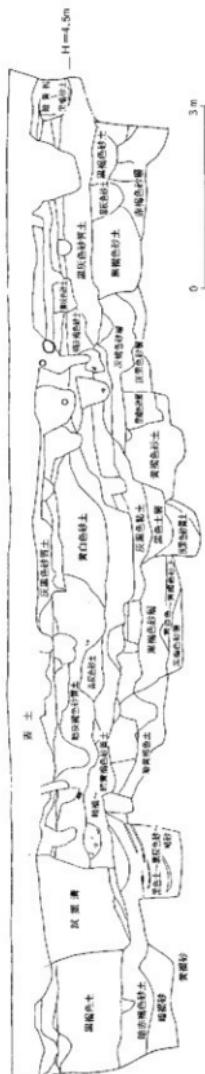


Fig. 3 調査区北壁土層断面図 (1/80)

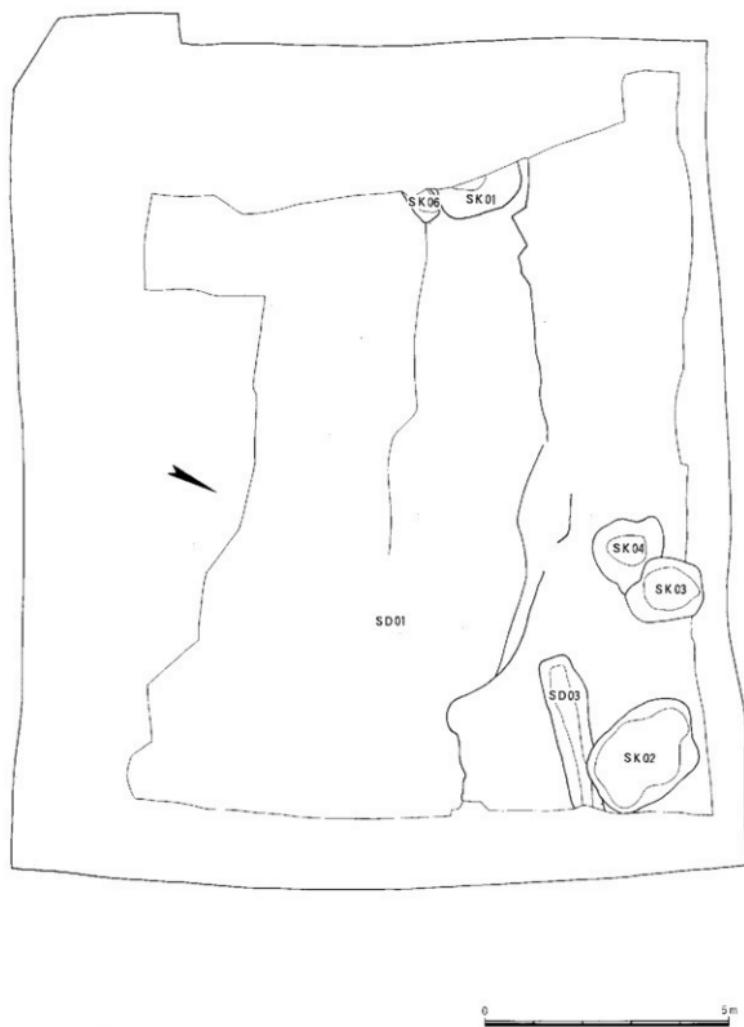


Fig. 4 第3次調査区全体図① (上面 1/100)

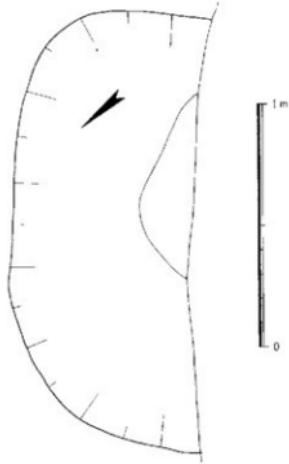


Fig. 5 SK01出土状況実測図 (1/20)

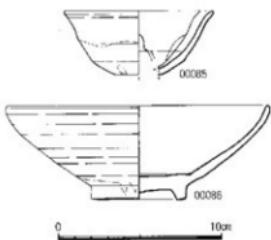


Fig. 6 SK01出土遺物実測図 (1/3)

面見込および体部にはヘラ描きの草花文を施す。高台置付きおよび外底部を除いて施釉が見られる。底径6.7cmを測る。

00015は、やはり龍泉窯青磁器碗Ⅰ類である。口縁部を欠失する。内面見込中央に「富」の浅いスタンプが残る。また、見込には4箇所に白色の目跡が残り、高台置付きにもハマの破片が固着する。

釉は、オリーブ色の半透明釉である。冰裂は見られない。また、胎土は、褐色味を帯びた灰色である。底部径は、6cmを測る。

00016は、口縁端部を欠く青磁器碗である。

内面の見込に花文及び体部に草花文をヘラ描きで施す。底部から立ち上がる胴部は丸みをおびて、柔らかい感じを与える。底部外面には、ハマの一部が固着している。

釉は、オリーブ色を呈し、透明性に乏しい。冰裂は見られない。体部の下部に小孔が多く見られる。

胎土は、黄灰色で、やや粗であるが混じりはない。

底部径6.4cmを測る。

00022は、口縁部を欠失する青磁器皿である。

立上り部分の残存が少なく、ほぼ底部に近い破片である。釉は、オリーブ色がかった透明釉を薄く掛けた。内面には使用による擦痕が認められる。

また、内底部には草文および櫛齒様工具による電光文を施す。釉は、底部端までは至っておらず、底部は浅いごけ底となっている。

また、胎土は、褐色味の薄い灰色である。底部径4.6cmを測る。同安窯系青磁器皿である。出土磁器類の中では最も量の多いものの一つである。

00023は、00022と同様の同安窯系青磁器碗である。こちらも口縁部立上りをほとんど残さない。

釉は、オリーブ色がかった透明釉を全体に薄く掛けた。

しかし底部端までには及んでいない。内面見込にはヘラ工具による草文、櫛齒工具による電光文を巡らす。

また、胎土は、褐色味の薄い灰色である。底部は、浅いごけ底となり、底部径5.5cmを測る。

00024は、口縁端部がやや肥厚する小型の青磁器碗である。残存する破片は小さいものである。

釉は、青味の半透明の釉を薄く掛け、外底部は施釉後に削りとっている。器面は、二次的火熱によって表面が荒れている。

また、胎土は、うすい灰色を呈し、堅く焼けている。小孔が多い。この青磁器も同安窯系青磁器である。

00029は、口縁部が急角度で屈折して立ち上がる青磁器皿である。全体の約半分を残す。内底部の

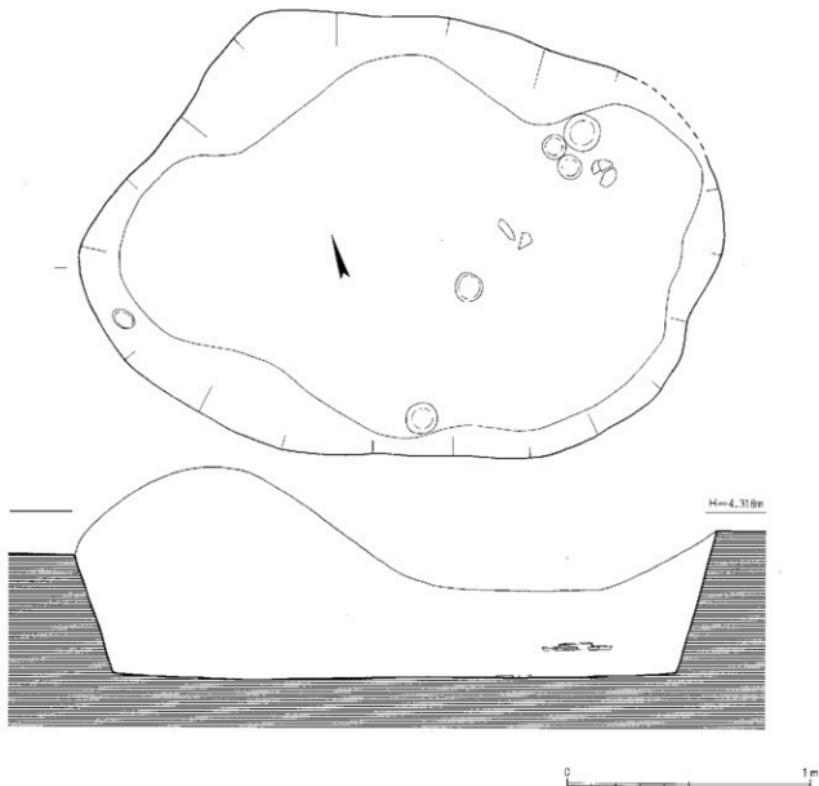


Fig. 7 SK02出土状況実測図 (1/20)

見込には、3本単位の櫛歯工具による曲線文が描かれる。

釉は、オリーブ色の透明釉で、全体に厚めに掛ける。器面には光沢がある。一部には氷裂がある。

また、外底部は施釉後に削りを加えており、露胎となっている。

胎土は、灰色で緻密となり、やや混じりが認められる。小孔あり。口縁部径は、9.2cm、底部径3.2cm、高さ2.3cmを測る。龍泉窯青磁器皿Ⅰ類である。

00030は、体部、口縁部を残さないほぼ底部のみの青磁器皿破片である。内面見込には片切彫花文が巡らされていたものと考えられる。

釉は、青緑味を帯びた透明釉を掛ける。また、氷裂あり。二次的火熱のためであろうか。底部は施釉後にヘラで搔きとっており、露胎となる。

胎上は、灰色を呈し、きめは細かい。小孔あり。焼成は良好である。底部径4.6cmを測る。龍泉窯系青磁器皿Ⅰ類である。

00031は、菊皿かと考えられる龍泉窯青磁器皿Ⅰ類の底部破片である。

体部外面は、ヘラもしくは形造りによる菊弁文で、稜の部分が白く浮きでる「出筋」となっている。また、内底部には撚歛工具による波状文が描かれる。

釉は、青緑色を呈し、透明性の残る釉で、粘性のために外面部部端や内面見込との境に厚く溜っている。

胎土は、灰色味を帯びた白色で、磁質であり、精良なものである。外底部は露胎となっている。底部径は、2.8cmを測る。青磁器皿Ⅰ類の中でも時期的に遅れるもので、13世紀代か。

00039は、青磁器碗口縁部の小破片である。外面に蓮弁文を施す。釉は、オリーブ色の透明釉で、水裂が若干認められる。

胎土は、灰色を呈し、精良である。龍泉窯青磁器碗Ⅱ類に相当する。13世紀。

00002は、白磁器大型碗である。体部の中位以上を欠失する。

釉は、かすかに墨りのある透明釉である。良く溶解して光沢がある。胎土の小孔部でピンホールになる。施釉は、体部に施釉したのちに高台邊部に施釉するものか。高台の中間が無施釉となっている。内面見込には著しい使用による擦過痕がある。

胎土は、白色を呈し、大部分は熔融しているが、白色砂粒が残る。小孔あり。また、鉄分を少量含む。釉下から少し吹き出してホクロになる。底部径は、7.7cmを測る。時期は、11世紀末から12世紀前半か。

00004は、薄造りの白磁器皿である。低く外方にのびる口縁部をもつ。

釉は、灰色の透明釉であり、一部火熱にあい、黄味を帯びており、水裂が入る。釉は体部内面および外面上半部に施され、他は露胎となっている。高台豊付き周辺には細かい砂が付着する。また、内面見込には、重ね焼きの耐火土が一部に残る。

胎土は、褐色味を帯びた灰色を呈し、きめは細かい。口縁部径12.85cm、底部径5.6cm、高さ3.2cmを測る。

00005は、底部高台が外開きとなる白磁器碗である。全体の約半分が残存する。

釉は、オリーブ味の透明な釉を薄く掛ける。施釉は、内面および高台外面に及び、他は露胎となる。また、施釉部には微細な水裂がある。つやがあり、全体に柔らかい感じを受ける。

高台には、内外面ともに細かい段が認められる。

胎土は、肌色味の白色を呈し、やや粗である。底部径3.0cmを測る。広東系か。

00006は、内湾気味に立ち上がる口縁部を有する白磁器碗である。

口縁部端は僅かに屈曲する。体部外面には回転ケズリ痕が顯著に認められ、全体に薄造りである。

釉は、緑色を帯びた透明釉で、釉下に白化粧が認められる。また、外面には微細な水裂がみとめられる。外面の口縁下には釉のタレが見える。

胎土は、灰白色で、きめ細かい。口縁部径15.7cmを測る。広東系。

00007は、高台唇付きのしっかりした白磁器碗である。

釉は、うすく白化粧をしたうえに淡いオリーブ味の透明釉を掛ける。熔融も顯著である。水裂は認められない。釉は、高台外面の一部に垂れる。

胎土は、褐味の白灰色を呈し、きめ細かい。焼成は良好である。高台内面の細かい段が認められる。底部径は、6.0cmを測る。白磁器碗Ⅱ類。広東系。

00008は、00007と同様の白磁器碗である。

釉は、淡青色の透明釉を掛ける。青白磁といえる。水裂が認められる。施釉は、内面及び外面の下

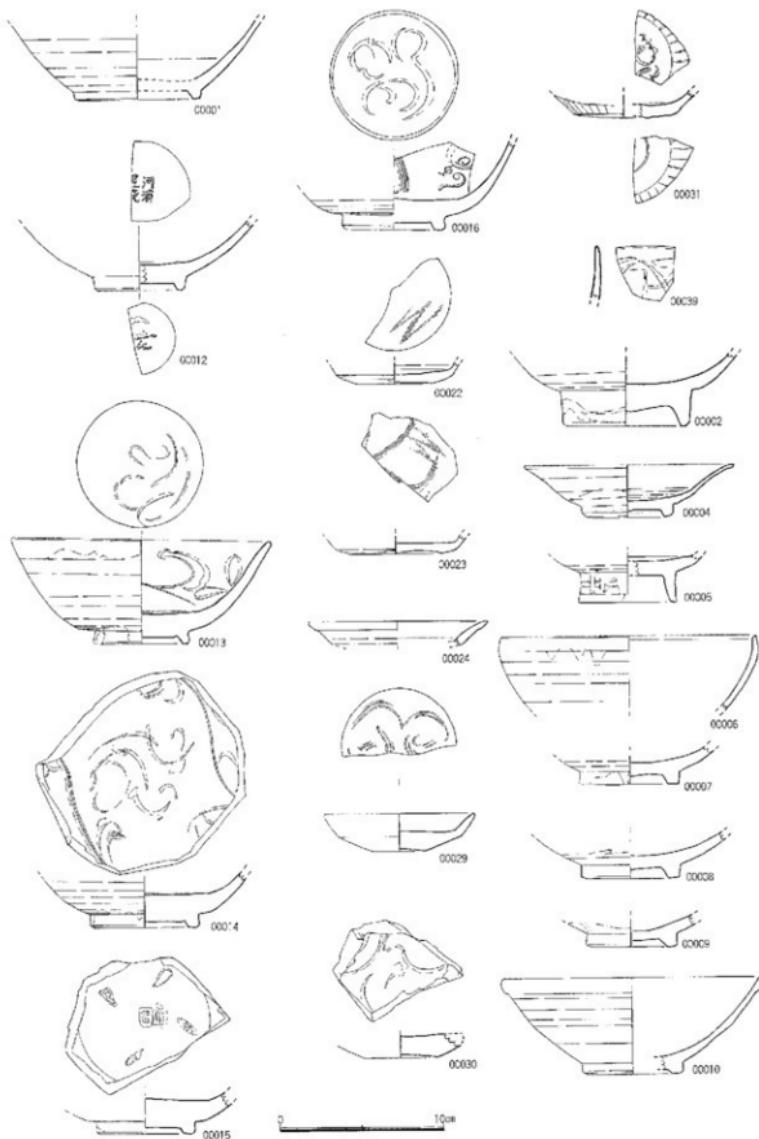


Fig. 8 SK02出土遺物実測図① (1/3)

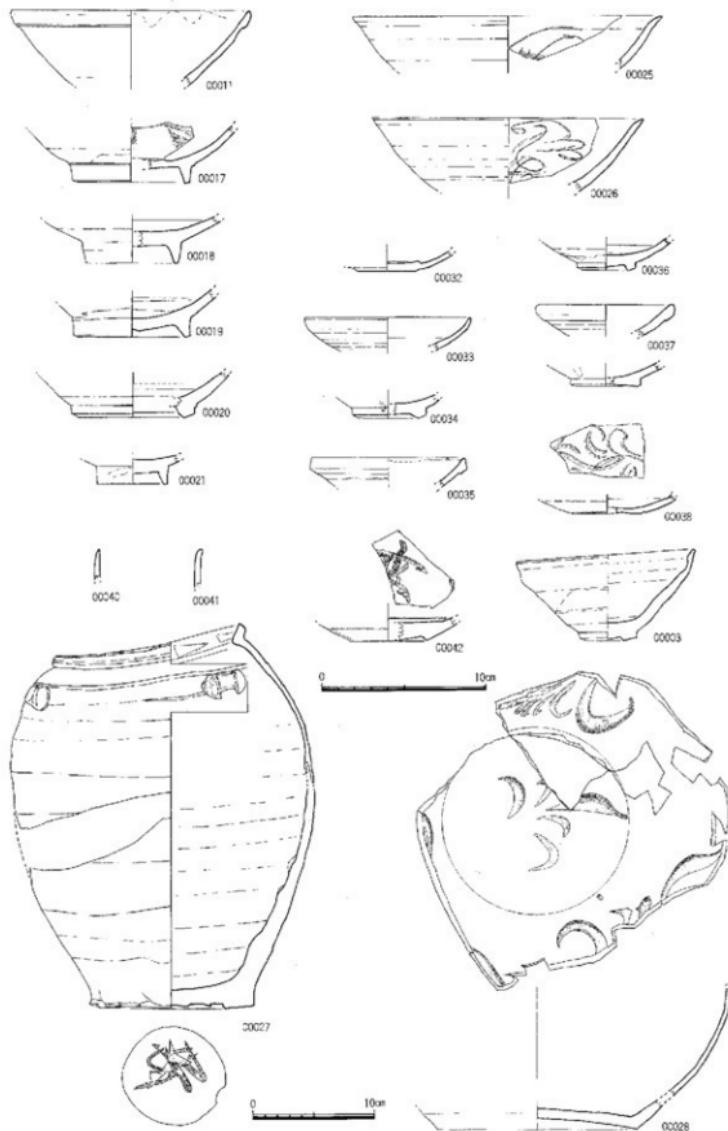


Fig. 9 SK02出土遺物実測図② (1/3)

端よりやや上がった位置まで行わされており、外面部端は溜り気味である。露胎部分は、ケズリが残り、高台内面には細かい段が見える。

胎土は、灰白色を呈し、かなり磁化している。中に黒点が少々認められる。小孔あり。底部径は、6.0cmを測る。白磁碗II類。広東系。

00009は、00008と同様の特徴を持つやや小型の白磁器碗である。

釉は、うすく白化粧したうえに褐味の半透明釉を掛ける。器面に光沢がなく、表面に白い粉が浮かんだようになっている。また、内面見込は、小さな茶溜りを作っている。

胎土は、褐味の黄白色を呈し、やや粗である。中に白い小砂、黒点を含む。小孔あり。底部径5.6cmを測る。白磁碗II類。広東系。

00010は、端部が小さな玉縁となる白磁器碗である。

底部をほとんど欠失するが、バランスのとれた薄造りの秀品である。口縁下から底部にかけてはケズリが顕著に認められる。外底部にはハマの痕跡が残る。

釉は、オリーブ色がかった透明釉を掛ける。器面には小さなピンホールがたくさん出ている。

胎土は、うすい灰色で、きめ細かい。なかに白い小砂が少々入る。よく磁化がすんでいる。口縁部径16cm、底部径6.2cm、高さ5.9cmを測る。白磁碗IV類。

00011は、00010と同様の特徴を持つ白磁器碗である。底部を欠失する。

釉は、クリーム色の不透明釉を掛けた。外面下部の一面にピンホールが認められる。内面の一部に釉ダレが見られる。胎土は、黄灰色を呈し、焼成甘く軟質である。口縁部径14.8cmを測る。白磁碗IV類。

00017は、細い高台を有する白磁器碗である。

釉は、淡いオリーブ色を含む透明の釉である。水裂は認められない。内面には見込に鏡を造り、櫛描き曲線文を施す。胎土は、灰白色を呈し、きめ細かい。磁質である。中に黒点少々。底部径7.2cmを測る。11世紀末~12世紀前半か。

00018は、細い高台を有する白磁器碗である。外面はすべて露胎、内面に釉が残る。釉は、淡灰色の透明釉にオリーブ色の擦けかけの粒が散っている。胎土は、灰白色を呈し、精良である。磁化している。底部径5.6cmを測る。白磁碗VI類の底部と考えられる。

00019は、やや低く外側に踏ん張る高台を有する白磁器碗である。釉は、灰色を帯びた半透明釉である。外面は端部よりやや上がった位置まで施釉する。また、内面は施釉後に不整円に輪状釉ハギを加えている。胎土は、うすめの灰色を呈し、精良である。良く焼けている。底部径7.2cmを測る。白磁碗VI類。

00020は、底部の約3分1ほどを残す白磁器碗の破片である。口縁などを残さないので或いは大型の鉢となるかもしれない。外面は露胎である。

釉は、かすかに青みがかった透明釉である。内面見込には、輪状釉ハギが認められる。また、胎土はうすい灰色を呈し、混じりが少ない。良く焼けている。

00021は、小型の白磁碗である。底部の保存はよくない。釉は、オリーブ色を帯びる半透明釉を掛ける。高台外面まで施釉を行っている。胎土は、灰白色を呈し、やや粗である。底部径4.4cmを測る。

00025は、体部がやや緩く開いた白磁器碗である。釉は、青みの半透明釉を掛けしており、よく溶けている。口ハゲ白磁に良く似た釉である。外面に櫛齒文様が残る。胎土は、白色を呈し、磁質である。口縁部径19cmを測る。

00026は、白磁器碗である。口縁に刻みをいれ、輪花をつくる。また、内面は、ほほ線描きの割花

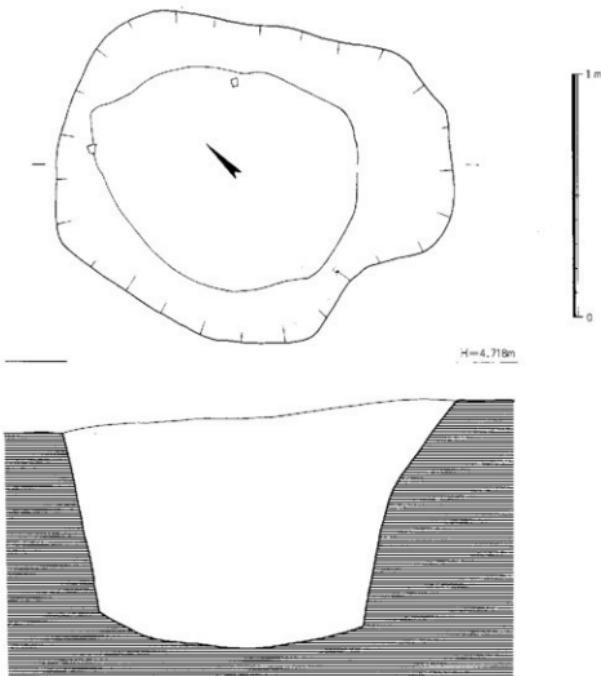


Fig.10 SK03出土状況実測図 (1/20)

文を施している。釉は、淡灰色の透明釉を掛ける。胎土は、うすい灰色を呈し、精良である。小孔あり。口縁部径16.3cmを測る。

00032は、小型の白磁器皿で、平底をなす。釉は、灰肌色で、やや渦る。器面には細かい氷裂が見られる。胎土は、淡肌色を呈し、やや粗である。底部外底は露胎となる。底部径3.6cmを測る。

白磁皿平底Ⅱ類で、同碗Ⅱ類に対応しよう。

00033は、00032の皿の上半部に相当する白磁器皿である。薄造りで、内湾気味に外方に開く。これらは、11世紀末～12世紀前期の所産であろう。

00034は、白磁器皿である。底部を僅かに残す。外面は露胎である。釉は、オリーブ味の透明釉が薄く掛かる。胎土は、灰白色を呈し、磁質をなす。底部径3.6cmを測る。

00035は、口縁部が肥厚する白磁器皿である、端部は、口ハゲとなっている。釉は、オリーブ味の透明釉を掛ける。光沢あり。胎土は、褐味の灰色を呈し、やや精良である。口縁部径9.6cmを測る。

00036は、高台を付す白磁器皿である。釉は、やや白渦した半透明釉を掛ける。また、胎土は、灰白色を呈し、やや精良である。底部径3.6cmを測る。

00037は、上下は同一個体と考えられる白磁器の高台付き皿である。釉は、青みを帯びた透明釉である。胎土は、灰色を呈し、小孔が多い。口縁径8.6cm、底部径4.4cmを測る。

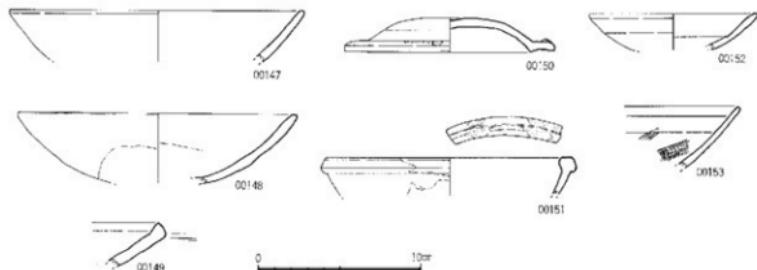


Fig.11 SK03出土遺物実測図 (1/3)

00038は、白磁器皿である。底部は露胎。内面に片切彫文を施す。釉は、クリーム色で氷裂が入る。胎土は、黄白色を呈する。底部径4cmを測る。白磁皿類。

00040は、白磁器皿の小破片である。口ハゲである。口縁端に油煙が付着する。釉は、灰白濁の不透明なものである。胎土は、灰白色を呈する。

00041は、同様の口ハゲの白磁器皿である。釉は同様で、胎土は黄味の灰白色を呈する。

00042は、染付皿である。明代の所産である。文様は、外側と見込にあり、見込には文字と思われる文様があり、暗い藍色で描かれる。釉は、灰白色の不透明で、氷裂が見られる。また、胎土は、明るい淡橙黄色で、混じりが少なくて小孔あり。

00003は、黒釉碗である。釉は、漆黒光沢釉の表面には茶褐色禾目、小疵が浮く。口端は、釉が薄く、褐色のつやがない。胎土は、暗灰色で褐味がかったり。白い小砂が残る。きめは比較的細かく、焼成は良好である。口縁部径11.1cm、底辺径3.5cm、高さ5.25cmを測る。

00027は、陶器四耳壺である。全体に焼成時のひずみが大きく、口縁上端は斜めに傾いている。口縁近くには沈線、波状文を巡らし、4個の半べったい耳が貼付られている。底部外面には、墨書きがあるが字の内容は不明である。

釉は、オリーブ色の釉を薄く掛ける。外面は上部に光沢あり。下部は火のまわりが悪く生焼けである。口には耐火上目跡あり、また、本体と同質の器の接着痕あり。重ね焼きをしたものであろう。

口径15.5cm前後、底部径13.5cm、高さ30cmを測る。

00028は、陶器黄釉鉄絵鉢である。口縁部を失う。外面は露胎となる。文様は内面見込に草花文を1箇所、体部内面に3箇所描いている。

釉は、暗オリーブ色の不透明釉で、火に遭ったものか光沢がない。

胎土は、灰色を呈し、砂の細かい黒、白の粒を含む。露胎部分は、ベージュもしくは褐色を呈する。底部径16.5cm、残存高13cm程度である。

S K03 (Fig.10,11)

調査区北側の端部に検出された隅丸長方形の土坑である。規模は、長辺長1.6m、短辺長1.3m、深さ0.95m以上である。埋土中から白磁器碗、褐釉陶器碗、蓋、瓦器塊、瓦質土器捏鉢が出土した。

出土遺物 (Fig.11)

00147は、瓦器塊である。口縁部のみの破片である。器色は、内外面ともに淡い灰色を呈する。器

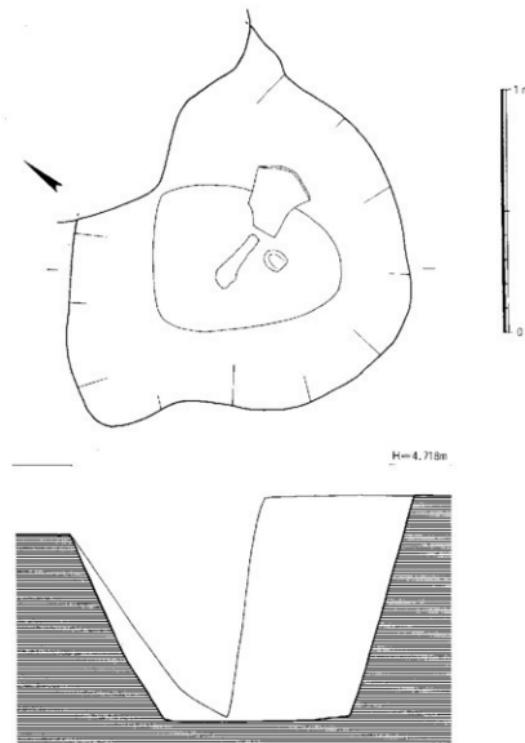


Fig.12 SK04出土状況実測図 (1/20)

面の調整はヘラナデ後に横ナデを加える。口縁部径18cmを測る。

00148も瓦器塊である。内外面ともに淡い灰色を呈する。口縁部に近い内外面では炭素の吸着が十分で、黒色となっている。内底部の荒れが著しい。口縁部径は17cmを測る。

00149は、瓦質土器の捏鉢破片である。口縁は内外に肥厚して、内面は跳ね上げ状となる。内外面ともに灰色を呈し、一部に自然釉がみられる。調整は内外面ともに横ナデである。胎土に砂の混入が多く、焼成は堅緻である。

00150は、褐釉陶器の蓋である。全体にひずみが大きい。口縁端部の内外に黄色砂、白色粘土が付着している。内面の露胎部はセピア色となる。口縁部径13cmを測る。

00151は、褐釉陶器の鉢である。内外面ともに褐色釉を

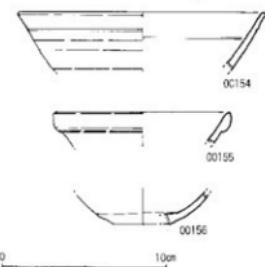


Fig.13 SK04出土遺物実測図 (1/3)

薄く掛ける。内面には露胎となる部分もみられる。口端には白色の砂目が規則的におかれている。胎土は、淡い灰色を呈する。口縁部径15cmを測る。

00152は、小型の白磁器碗である。釉は、淡い灰色の透明釉を掛ける。口端外面にはケズリが顕著に見られる。内面の見込との境は段をなす。胎土は、淡い灰色を呈する。口縁径10.2cmを測る。

00153は、白磁器碗である。体部内面に描書き文及びくち離の直下に1条の沈線を巡らす。釉は、やや緑色を帶びている。胎土は、白色を呈する。

S K04 (Fig. 12,13)

調査区の北側のS K03に隣接して検出された。規模は、長辺長1.2m、短辺長0.9m、深さ0.9mを測る。埋土から白磁器碗などの少量遺物が出土した。

出土遺物 (Fig.13)

00154は、白磁器碗である。底部を失う。釉はやや緑がかった釉を全体に薄く掛ける。外面はケズリによる器面の後が顕著に残る。器壁は全体に均一で、分厚い感じを受ける。胎土は、淡い灰色を呈する。口縁部径15cmを測る。

00155は、小型の玉縁を有する白磁器碗である。端正な造りで、施釉前の細かいケズリ調整を伺うことができる。口縁部径10.6cmを測る。

00156は、小型の白磁器皿となるか。外面の底部近くは露胎となるが、全体に緑味の薄い釉をうすく掛ける。

S K06 (Fig. 14,15)

調査区の西端に検出された小土坑で、完掘されていない。残存規模は、長辺長0.8m、短辺長0.5m程度の溝条に長い形状となっている。遺物の出土は少ないが、下面の遺物も混入しており、土師器皿等の他に古い土器類が出土している。

出土遺物 (Fig.15)

00162は、土師器高杯の脚部破片である。内外面ともに暗褐色を呈し、器面調整は横ナデである。外面の一部にススが付着している。砂の混人が多い。焼成は良好。径18cmを測る。

00163は、土師器壺口縁部破片である。内外面ともに暗褐色を呈し、外面にススが付着する。外面タテハケ、内面横ハケを施す。胎土は粗である。

00164は、土師器皿である。底部は、糸切り離しである。器色は、暗褐色を呈し、内外面ともに横ナデである。

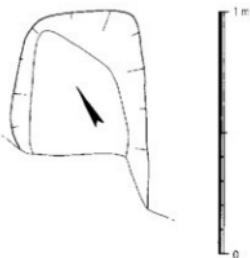


Fig. 14 SK06出土状況実測図 (1/20)

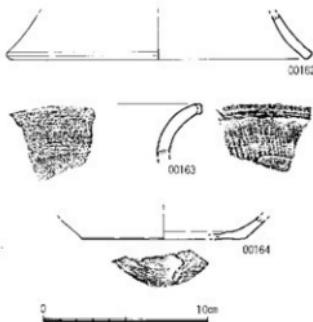


Fig.15 SK06出土遺物実測図(1/3)

・溝

SD01(Fig.16~21)

調査区の中央をほぼ東西に走る大溝で、今回調査では北側の肩口を検出するにとどまった。しかしながら調査によって検出された遺構の残存状況や溝内で出土した各時期の遺物から考えるとこのSD01溝の掘削がいかに他に存在したはずの遺構に決定的な打撃を与えたかが思いやられる。

溝は、幅が1m以上、深さ3m強の大溝で、埋積は土層断面にみるように比較的急激になったようと思われる。図に示した土層は、調査区の壁を直に切り取れないうらみから、2枚の図を投影して合成したものである。

以下では、土層及び出土遺物について述べることとした。

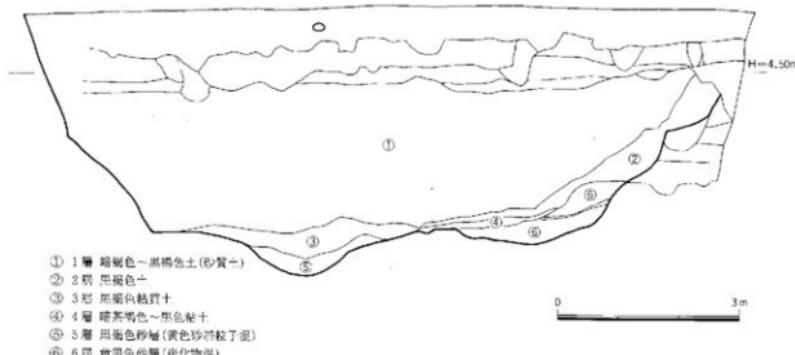


Fig.16 SD01西壁土層断面実測図(1/80)

溝の土層層序 (Fig.16)

溝の層序については、出土する遺物を可能な限り層毎に区別して取上げをおこなうために、以下の様に区別した。

- 0層—搅乱層など
- 1層—暗褐色～黒褐色土(砂質土) (1～1.3mの層厚)
- 2層—黒褐色土
- 3層—黒褐色粘質土
- 4層—暗茶褐色～黒色粘土
- 5層—黒褐色砂層(黄色砂層粒子混)
- 6層—黄黑色砂層(炭化物混)である。

次に各層から出土した遺物類の主なものをあげておきたい。

0層—白磁器碗Ⅱ、V類、国産陶器(瀬戸灰釉皿)など多数

1層—青磁器碗類、白磁器類、国産陶器(備前焼、常滑焼)、中国産陶器(褐釉、鉄絵白釉枕、長沙窯褐斑黄釉碗、天目碗など)、中国産染付など

2層—青磁器(越州窯、連江窯、龍泉窯、同安窯)、青白磁器、白磁器、国産陶器(備前焼)
中国陶器(口縁内折大甕、天目碗)など

5層—中国産陶器(無釉捏鉢、褐釉壺)など

6層—中国産陶器(綠釉)など

第1層出土遺物 (Fig.17,18)

00056は、青磁器皿である。同安窯系である。見込に櫛齒による電光文や草花文を描く。釉は、緑色をおびた透明な釉である。器表の氷裂は見られない。胎土は、灰色を呈し、小孔が多い。底部は露胎となり、暗褐色を呈する。底部径4.6cmを測る。

00057は、同様の同安窯系の青磁器皿である。内面に櫛齒工具による電光文、草花文を描く。底部は露胎となり、茶褐色を呈する。釉は、青灰色の透明釉を掛ける。氷裂なし。胎土は、灰色を呈し、磁化が認められる。底部径は3.6cmを測る。

00058は、同様の同安窯系青磁器皿である。底部は、露胎となり、褐灰色を呈する。釉は、灰青色のやや墨りのある透明釉である。氷裂は認められなかった。また、胎土は、うすい灰色を呈し、磁質である。内面に櫛齒工具による施文が認められる。底部径4.6cmを測る。

00059は、小破片であるが、同様の同安窯系の青磁器皿である。釉は、灰味の透明釉を掛ける。氷裂は認められない。体部途中まで釉が掛かる。胎土は、褐味の灰色を呈し、きめ細かい。小孔多し。底部径5.6cmを測る。

00060は、同様の同安窯系の青磁器皿である。内面見込には櫛齒工具による文様が描かれる。釉は、青味の透明釉で、体部の途中まで掛かる。胎土は、淡い灰褐色を呈し、やや粗である。小孔あり。底

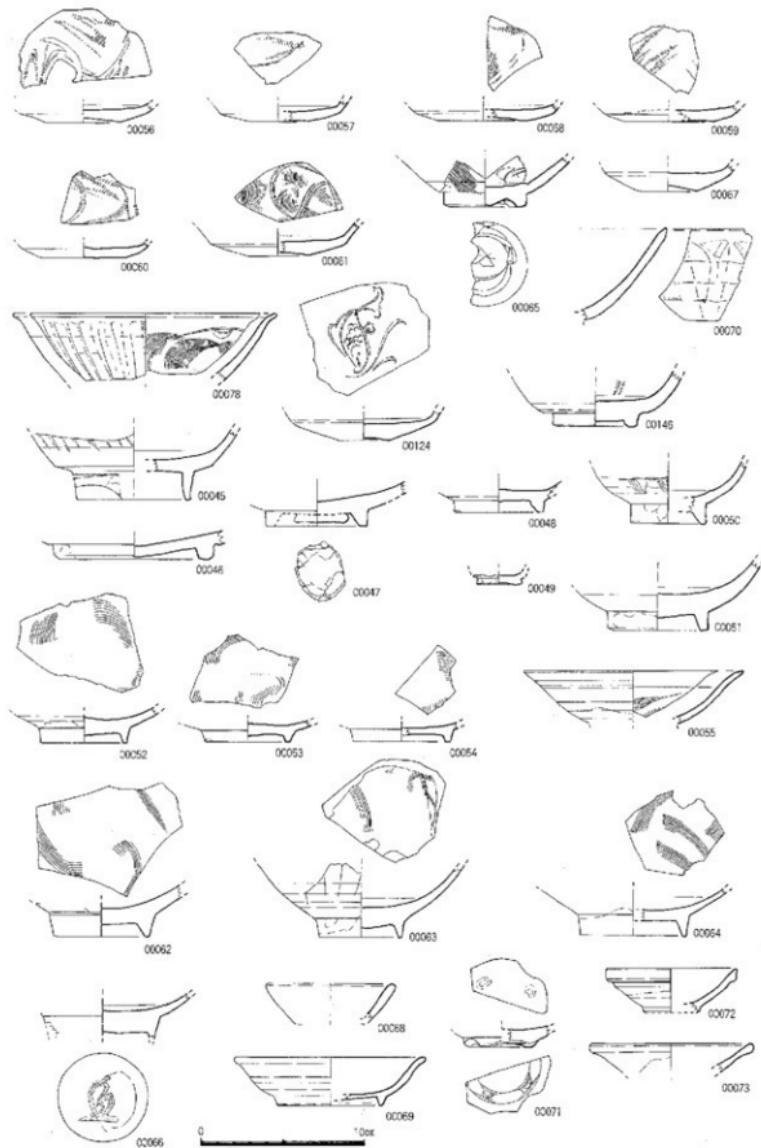


Fig.17 SD01第1層出土遺物実測図① (1/3)

部径5cmを測る。

00061は、内面見込に櫛描き文及びヘラ切り文を施す龍泉窯系の青磁器皿である。釉は、青味のオリーブ色で半透明である。よくとけおり、氷裂はない。また、胎土は、灰色を呈し、やや粗である。小孔あり。底部径は、3.6cmを測る。

00065は、外面に櫛描き文、内面に草花文を施す同安窯系青磁器碗である。底部外面の成形は非常に荒いものである。釉は、オリーブ色を帯びる透明釉である。氷裂は見られない。また、胎土は、褐味の灰白色を呈し、きめは細かい。層状に孔あり。磁化しており、中に黒点あり。底部径は5cm。

00067は、龍泉窯青磁器皿である。底部は施釉後に削り取っており、灰褐色を呈する。釉は、青緑を帯びた透明釉で、氷裂なし。器表の磨滅が著しい。また、胎土は、灰色を呈し、なかに黒点が入る。底部径は3.4cmを測る。

00070は、小片ながら龍泉窯青磁器碗である。釉は、茶味のオリーブ色の透明釉である。外面に蓮弁文を施す。また、胎土は、灰色を呈し、精良である。

00078は、越州系かと考えられる青磁器碗である。釉は、灰緑色の透明釉である。光沢は少なく、おとなしい。また、胎土は、灰色を呈し、きめが細かく、混じりが少ない。熔融している。小孔すくなし。外面に蓮弁文、内面に櫛描き文を施す。口径16.2cmを測る。北宋後期か。

00124は、龍泉窯青磁器皿である。釉は厚く、透明度が高い。内面見込に魚文を描く。底部は露胎である。胎土は、灰白色を呈し、中に極小な黒い粒子が認められる。底部径3cmを測る。龍泉窯青磁皿Ⅰ類-2に相当。

00146も龍泉窯青磁器碗である。口縁を欠く。内面体部に片刃彫り文が認められる。釉は、空色で、厚くかけられている。胎土は、灰白色を呈する。外面の高台疊付き部と外底は露胎となる。底部径6cmを測る。

00045は、広州西村窯のものと考えられる白磁器碗である。外面胴部の屈曲は棱線が明瞭であり、高台外面まで施釉している。釉は、淡いオリーブ色で、透明である。また、光沢があり、氷裂も認められる。化粧は認められない。また、胎土は、褐味のうすい茶色を呈し、精良である。よくとけおり、小孔が少々認められる。底部径7cmを測る。

00046は、白磁器の大皿か。釉は、乳白色と厚いところはオリーブ味を帯びる。氷裂はない。また、胎土は、黄白色を呈し、やや粗である。中に所々灰褐色砂の大小が混じる。内面は使用による摩擦痕が顕著に認められる。底部径は9.2cmを測る。

00047は、白磁器碗Ⅱ類-1に相当する。外底部に灰褐色のしまらない砂目の土を丸めてつぶしたトチがそのまま残っている。胎土は、淡い褐灰色を呈し、やや粗である。底部径6.2cmを測る。

00048は、白磁器碗Ⅱ類-2相当の小型碗である。釉は、かすかに茶を帯びる透明釉である。細かい氷裂あり。化粧の可能性もある。また、胎土は、ベージュで、白い小砂を含む。底部径5.4cm。

00049は、白磁器ミニチュア杯である。釉は、黄灰色で、透明度がない。細かい氷裂が見られる。また、胎土は、黄白色を呈し、精良である。底部外面は露胎となる。底部径2.8cmを測る。

00050は、白磁器碗の小型V類に相当する碗である。外面に櫛描き文を施す。釉は、よくとけずに不透明である。褐味の灰褐色を呈する。外面は、ピンホールが多い。胎土は、灰色を呈し、粗である。小孔多い。底部径4.4cmを測る。

00051は、白磁器碗V類相当の碗である。釉は、灰色の半透明で、厚い。外面に大きめのピンホールが出る。胎土は、淡い褐灰色で、小孔が多い。底部径は6.2cmを測る。

00052は、白磁器碗である。内面に櫛描き文を施す。釉は、かすかに茶色の半透明のものである。

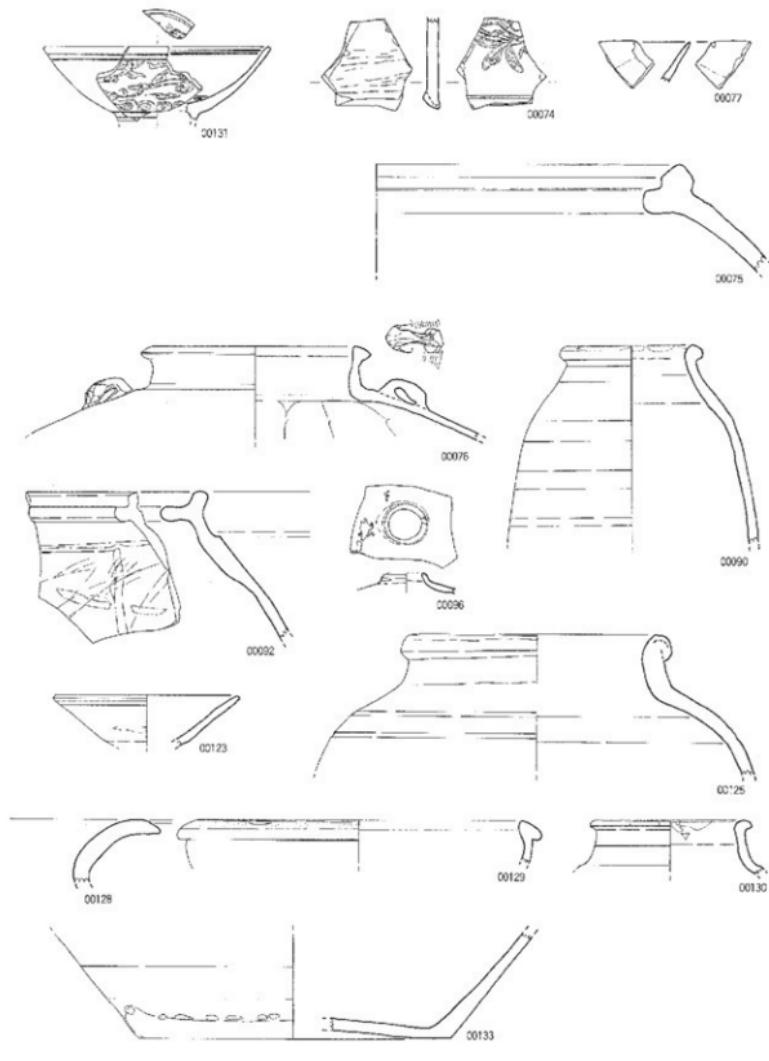


Fig. 18 SD01第1層出土遺物実測図② (1/3)

外面にピンホール多し。胎土は、褐味の灰色を呈し、磁化、小孔多い。白い小砂が入る。底部径5.2cmを測る。

00053は、やや高台が低い白磁器碗0-I類相当の碗である。釉は、かすかにオリーブ色を帯びる透明釉である。水裂なし。胎土は、褐味の灰白色を呈し、小孔あり。磁質。底部径5.2cmを測る。

00054は、同様の白磁器碗である。釉は、淡い灰オリーブ色の半透明釉である。水裂はない。胎土は、淡い褐灰色を呈し、小孔あり。底部径6cmを測る。

00055は、白磁器碗0-II類相当の碗である。器は比較的浅い特徴をもつ。釉は、オリーブ味の半透明のもので、厚い。外面には大きめのピンホールが出る。胎土は、褐味の淡い灰色を呈し、小孔が多い。口径13.5cmを測る。

00062は、分厚い高台を有する白磁器碗VI類に相当する碗である。釉は、灰味の不透明なものである。また、胎土は、褐味のうすい灰色を呈し、小孔多い。底部径は、5.9cmを測る。

00063は、白磁器碗VII類相当の碗である。内面には、彫書き文、外面に綴の線文を施す。釉は、かすかに青みの透明なものである。胎土は、灰味の白色を呈する。中に黒点を含む。底部径5cm。

00064は、同様の白磁器碗である。釉は、オリーブ色を帯びた透明のものである。また、胎土は、灰白色を呈し、中に黒点が見える。底部径6.5cm。

00066は、白磁器碗VあるいはVI類相当の碗である。釉は、青みを帯びた透明のものである。胎土は、黄色味を帯びた白色を呈し、やや粗である。小孔多い。外底部に不明な墨書が残る。底部径5.5cmを測る。

00068は、白磁器口ハゲ皿である。非常に厚手で、口端に油煙が付着する。釉は灰色で、透明である。胎土は、淡い灰色で細かい。

00069は、白磁器皿である。明代の所産である。釉は、灰色を帯びた白色で、厚い。また、化粧はない。胎土は、灰白色を呈し、細かい。磁化しており、柔らかい感じである。口径11.7cm、底部径6.5cm、高さ3cmを測る。

00071は、白磁器皿D群に相当する皿である。高台の抉りは5個所に、また目跡は4個所に復元が可能である。

00072は、高台の付いた山磁器皿である。うす灰色の不透明な釉で、水裂はない。また、胎土は、薄い灰色を呈し、磁化しており、小孔多い。口径8cm。

00073は、白磁器口ハゲ皿である。口端がやや膨らむ。灰白色の不透明な釉である。粘性があり、厚めである。胎土は、灰白色を呈する。磁化している。口径10cm。

00131は、染付碗である。外面には草文と花弁文、内面は見込に二重の闇線と花文を施す。胎土は、白く、混ざりものが少ない。口径は14cm程度とかんがえられるが、小破片のため正確ではない。釉は白濁している。

00074は、破片であるが磁州窯系の鉄絵白釉枕である。土は淡灰褐色で、精良である。天井は二枚張合わせか。うすく白化粧したうえに黒褐色の鉄絵を筆描きし、上に透明釉を掛けたが、火に当たったよう荒れている。現状は肌色がかった灰色を呈し、つやはなく、柑皮状である。

00077は、長沙窯褐斑黄釉碗の破片である。ハチミツ色の透明な釉で、口縁部の数個所に金茶色の三角斑を施す。胎土は、赤土色で細かい。陶胎。白化粧をする。

00075は、褐釉陶器壺の破片である。外面には斜めのタタキ目、内面には青海波状のタタキ目が浅く残る。釉は薄いところでは褐色となる。光沢あり。厚いところは灰濁する。胎土は、赤褐色を呈し、なかに白い大小の砂がたくさん入る。赤褐色の粒もある。口径は正確ではないが、35cm程度となるか。

00076は、無釉陶器の壺である。短い口に急激に膨らむ胴部をもつ。外面は筵目のようなタタキ痕、内面には無文のあて具痕が残る。耳は1個しか残っていないが、4個の可能性が高い。土は橙茶色で、こまかい。白砂粒褐色土粒を含む。口径14cm。

00090は、B群陶器瓶である。口縁は、丸く肥厚する。頸部はよくしまっている。釉は、緑を帯びた透明なもので、胎の色を映して灰緑色を呈している。体部の下半はかせて灰ベージュの粉が付着する。胎土は、灰色を呈し、粗である。中に黒点がはいる。口径は、9.8cm。11世紀末～12世紀前半の器形か。

00092は、褐釉陶器壺である。釉は、褐釉。表面に灰オリーブの不透明釉をかぶせているように見える。胎土は、あざき色で、細かい。白砂、橙褐色砂が混ざる。外面はタタキ目、内面は青海波のあて具痕が残る。

00096は、褐釉小口瓶である。釉は、茶褐色で、表面がぶつぶつしている。光沢あり。口近くに白土を用いた痕跡がある。胎土は、灰褐から灰色で細かい。白い小砂が少々混入している。磁灶窯の製品である。

00123は、天目碗である。口唇部には無色透明の釉を掛け、これ以下には褐色釉を丁寧に掛ける。胎土は、黄白色を呈し、中に極小さい黒い粒子が混じる。口径は11.2cmを測る。

00125は、備前窯の口縁である。胎土は、暗褐色で、2mm大の黒い小石から5mmまでの白黒の小石まで混じる。口縁の端部は一部折返してある。口径14.4cmを測る。

00128は、常滑焼窯の口縁部である。釉が口縁の一部に見られるが灰が落下したもの。胎土は、灰色に黒い粒子と雲母が混じり、ガサガサした感じになっている。

00129は、中国産施釉陶器鉢の口縁である。褐釉で全体に薄く掛けた。光沢がある。口縁の釉を一周搔き取っている。胎土には、赤と黒の粒子が含まれるが、全体に密である。口径19.8cmを測る。

00130は、中国陶器のB群に相当する褐釉壺である。口唇部には2つ目跡があり、焼き色が異なる。胎土は、暗灰色を呈し、中に黒い粒子が含まれる。口径10cmを測る。12世紀前半の所産であろう。

00133は、中国陶器A群壺底部である。底部端付近に一部施釉部分があり、他は掛からない。底部は平底のやや上げ底となっている。胎土は、黄灰色を呈し、なかに2mmや5mmまでの黒、白、赤の粒が含まれる。底部径は、19cmを測る。内面にはケズリの痕が見られ、外面の底部付近には窪んだ指跡様のものが連続してならんでいる。

第2層出土遺物 (Fig.19,20)

00081は、越州窯系青磁器碗である。底部高台は低く、臺付きの胎を軽く削り、目土をおいている。また、内面にも白い砂をおく目跡が規則的に観察される。釉は、オリーブ色を呈し、透明性がある。よくとけている。また、胎土は、褐味の灰色を呈し、精良である。底部径5.9cmを測る。

00112は、青磁器折口浅碗である。口縁は端部でほぼ水平に近く折れ、跳ね上げ状となる。口縁直下外縁には1条の沈線を巡らせる。釉は非常に厚く、全体に掛かる。器面に氷裂は認められない。胎土は、灰白色を呈し、良好である。口径は、12.4cmを測る。龍泉Ⅲ類。13世紀。

00115は、高台の非常に低い青磁器碗である。内面には片刃彫文の草花を描く。釉は、オリーブグリーンで、粘りがある感じである。内面と外面の途中まで掛かる。氷裂はみられない。胎土は、灰色を呈し、中に1.5mmほどの小石も混じる。体部と高台との境に1条の沈線を巡らす。底部径3.1cm。述江窯系の製品か。

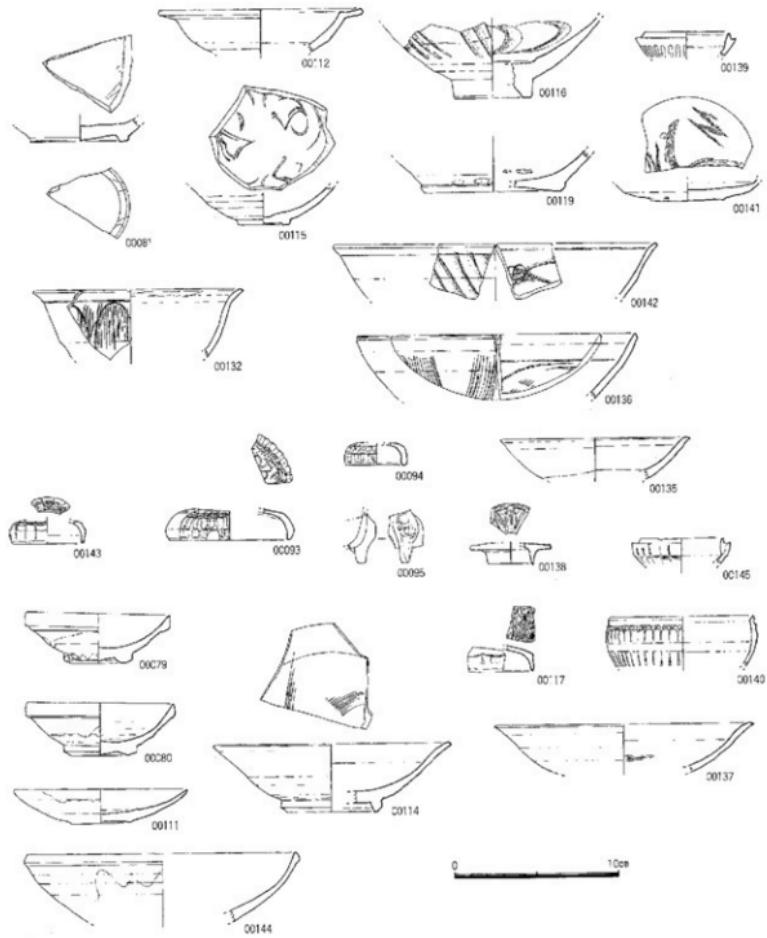


Fig.19 SD01第2層出土遺物実測図① (1/3)

00116は、同安窯系青磁器碗Ⅰ類相当の碗である。外面に縦の片刃刻線、内面に片刃刻文を施し、見込には圓線を巡らす。見込中央には刻文があるようだが残りが悪く不明瞭。釉は、淡いオリーブグリーンで、透明度は高い。細かな貫入が全体にある。胎土は、淡黄色を呈し、中に極小さな黒粒子を含む。体部の下部以下は露胎となる。底部径4.6cm。

00119は、越州窯系青磁器碗である。外面の残存部は露胎となっている。底部端には指による押圧痕、指ナデが認められる。また、底部内面には目跡が見える。釉は、内面のみに残り、うすい中間層

を形成している。胎土は、暗褐色を呈し、中に0.5mm前後の黒粒子と径1mm前後的小石も混じる。底部径は8.4cmを測る。

00139は、青磁器合子の身である。外面に陰刻の縱線が施されている。また、口唇部から蓋と接する部分の釉は、削り取っている。釉は、淡い緑色で、透明性は高く、外面に厚く、内面には薄く掛ける。貫入が全体に細かく入る。胎土は、白味を帯びた黄色を呈する。口径5.2cmを測る。

00041は、同安窯系青磁器皿II類相当の皿である。高台をもたない。見込に櫛描きによる電光文が残る。また、見込と底部端には目跡が認められる。釉は、空色で透明度は高く、外面途中まで掛ける。胎土は、灰色を呈し、中に黒い粒子が混じる。底部径4.4cm。12世紀か。

00142は、龍泉窯系青磁器碗である。破片である。外面に片刃彫の刻文、内面には櫛描き文を施す。釉は、透明度の高いオリーブグリーンで、中間層を形成している。胎土は、濃灰色を呈し、混ざりは少ない。口径は約20cmと考えられる。

00132は、龍泉窯系青磁器碗である。外面には櫛描きの蓮弁文を施す。また、口縁直下に1条沈線を巡らす。釉は、黄緑色を呈し、透明度は高い。全体には細かい貫入がある。胎土は、灰白色を呈し、中に黒粒子が混じる。口径13.6cmを測る。

00136は、同安窯系青磁器碗II類相当の碗である。内外面には櫛描きの刻文が施されており、内面に1条沈線を施している。外面には櫛轆の調整痕が残り、口唇部は面取りしてある。釉は、透明度の高いオリーブグリーンで、全体に貫入が入る。胎土は、青灰色を呈する。口径17cmを測る。

00135は、小型の浅い青白磁器碗である。口端は外側に引き出している。内面の口縁下に1条沈線を巡らす。釉は全体に厚く、外面の途中まで掛ける。胎土は白色を呈し、良好な物である。口径11.4cmを測る。

00143は、青白磁器合子の蓋である。小破片である。型押しの製品で、造りも精緻である。口唇外面のみが露胎となり、他は全面に掛ける。器は薬段を有し、天井部は凸文を巡らす。胎土は白色を呈し、質は良好である。口径4.4cmを測る。

00093は、青白磁器合子の蓋である。小破片である。型押しの製品で、造りも優れている。器に薬段を有する。釉は、かすかに背みのある透明なもので、外面と内面の大井部に施釉している。胎土は、白色を呈し、精良である。また、磁化している。口径7.9cm、高さ3.2cm、天井径3.2cmを測る。

00094は、青白磁器合子の蓋である。器法量も小さく、小破片である。口唇部外面以上は施釉を行っている。型押しの製品であるが、やや造りは雑である。釉は、わずかに青緑味の透明なものである。胎土は、白色を呈し、精良である。まったく磁化している。口径3.8cm、高さ1.35cm、天井部径3.2cmを測る。

00095は、青白磁器香炉の脚である。脚端部までを残す。全体に火に当たって荒れている。釉は、淡い青みのある透明な釉である。胎土は、白色を呈し、精良である。磁化している。

00138は、青白磁器蓋である。天井部には蓮弁文を陽刻する。釉は、天井部にのみ施し、立ち上がりなどは露胎となっている。胎土は、白色を呈し、中に黒粒子が混じる。最大径で5cmを測る。

00145は、青白磁器合子の身である。低い立上りを持つ型造りの製品である。立上りの形成は、施釉後に外面を削り取っているようである。釉は、体部外面の途中までと内面にかける。胎土は、白色を呈し、良好である。口径5cmを測る。

00117は、白磁器合子の蓋である。釉は、少し灰色に見える無色透明の釉である。口唇外面と内面以外に施釉している。天井部外面は凹線で施文する。胎土は、白色を呈し、良好である。口径は不明。

00140は、白磁器合子の身である。やや大型の器で、外面の肩部に凸状の粒がつき、その下は陰刻

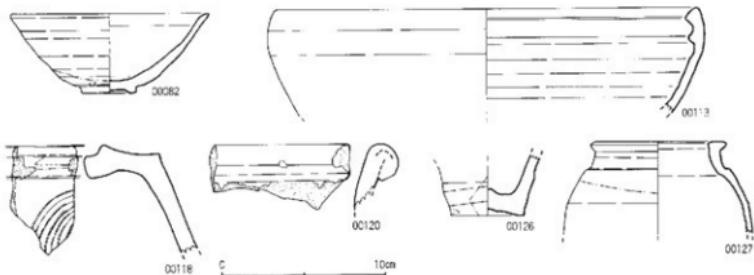


Fig.20 SD01第2層出土遺物実測図(2) (1/3)

線を施す。口唇部は釉を搔き取っている。釉は、無色透明で貫入はみられない。全体に象牙色を呈している。胎土は、少し黄味がかった白色を呈する。口径8.4cmを測る。

00079は、白磁器高台付き皿I類相当の皿である。内面及び外面途中まで施釉する。高台は、ケズリの際にボロボロに欠けている。外底部に焼け焦げた黒い物質が付着する。釉は、オリーブ味の灰色で不透明のものである。外面にビンホールが多い。また、胎土は灰色を呈し、細かい。磁化がすすむ。小孔多し。口径8.8cm、底部径4.2cm、高さ3cmを測る。

00080も同様の白磁器皿である。見込の半分ほどに釉がまわっていない。釉は、不透明な灰白色で、ビンホールが見える。胎土は、灰味の白色を呈する。磁化している。口径8.9cm、底部径4.4cm、高さ3.2cmを測る。同様に外底に黒い鉄滓のような焼けカスが付着している。

00111は、白磁器平底皿II類相当の皿である。見込に凸線あり。釉は、うすく内面全体と外面途中まで掛かる。貫入はない。胎土は、白色を呈する。口径10.6cm、底部径3.6cm、高さ2.2~2cmを測る。

00114は、白磁器高台付き皿III類相当の皿である。高台外面と底部は露胎となる。体部内面に、1条沈線を巡らす。内面見込には櫛描き文を施す。胎土は、灰白色を呈し、極小さな黒色粒子が混じる。口径14cm、底部径5.6cm、高さ4.2cmを測る。

00137は、白磁器高台付き皿III類相当の皿である。内面に櫛描き文と圓線を施す。全体にうす造りである。胎土は、白っぽい黄色を呈する。釉は、内外面ともに施し、細かな貫入が全体に見られる。口径15.6cmをはかる。11世紀か。

00144は、白磁器碗II類-1相当の碗である。小さい玉縁口縁を有する。釉は、全体に板細かな貫入がある。また、釉が厚くなった部分は白くかせている。胎土は少し黄灰色を帯びた白色を呈する。口径16.4cmを測る。11世紀。

00082は、天目茶碗である。底部付近は露胎となる。釉は、黒のベースに暗褐色の結晶が浮く。茶目は出でていない。下方ほど褐色となる。胎土は黒灰色を呈し、比較的細かい。白い粉のような混入物がある。露胎部は、暗褐色を呈する。口径12.1cm、底部径3.3cm、高さ4.85cmを測る。12世紀前半の可能性がある。

00113は、中国陶器C群相当の捏鉢である。口縁内部に二段の突帯を巡らせる。内外面にロクロ調整が残る。胎土は、粗質で、中に濃褐色の1~1.5mmの透明な小石や1mm前後の白、黄、赤色の粒子が多く含む。同様で0.5mm前後の粒子も含まれる。断面の中心は濃い褐色だが、外は黒くやけている。口径25.8cmを測る。

00118は、中国陶器C群相当の口折れの大甕である。釉は褐色で、内外面にかかり、外面の方が透

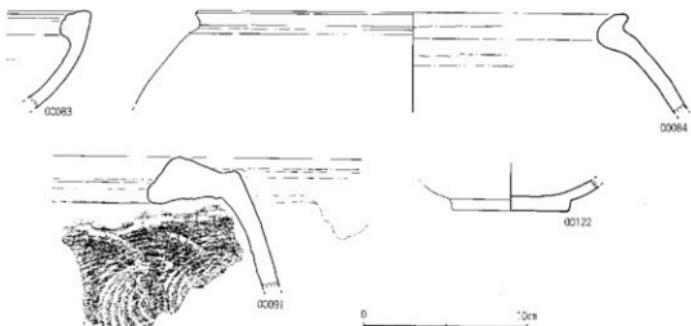


Fig. 21 SD01第4・5層出土遺物実測図 (1/3)

明度は高い。内面にタタキ状の弧文が残る。胎土は、黒に近い灰色を呈する。中には1mm大の白、黒、赤、黄の粒や3mm前後の黒、赤粒が混じる。口径は不明。

00120は、備前窯の口縁破片である。表面は褐色を呈する。口縁は折り返してナデている。隙間があいている。胎土は、黒と暗灰色、白い部分も層状にみえる。1mm前後の黒い粒が混じる。口径は41cm程度になると思われる。

00126は、中国陶器B群相当の施釉陶器瓶の底部である。鶏腿瓶である。外面は荒いロクロ調整。釉は外面に流し掛けで、灰色っぽいものでうすく掛ける。内面は無釉となる。胎土は灰色を呈し、0.5mm大の黒粒が多く混じり、2mmほどの小石も見られる。底部径4.4cmを測る。

00127は、中国陶器B群相当の施釉陶器小壺である。全体に綾いロクロ調整痕あり。釉は、内面全体と外側肩部下あたりまで掛かる。釉がたまって厚い部分は黄褐色。胎土は、赤褐色を呈し、0.5~2mmほどの赤色粒や2mm前後の白粒が混じる。口径7.6cmを測る。

第5層出土遺物 (Fig. 21)

00083は、無釉陶器の捏鉢口縁部破片である。外面は横ナデで、内面は使用によって摩耗している。口縁は内面に膨らみ、上端部に沈線状の溝を巡らす。内面の口縁直下は指で横ナデして丸く窪む。またその下部には横ナデもしくは横方向のタタキ目が見える。胎土は、褐味の灰色で細かい。中に黒褐色砂が混じる。露胎は、茶褐色を帯びる。陶胎。焼成は良好である。

00084は、褐釉陶器の壺口縁部である。小さく屈折する口縁で、口径約26cmを測る。体部はタタキ成形を行っている。釉は、外面が白化粧の上に褐オリーブ色の釉を掛けた。内面にはあづき色のマットな釉が掛かる。また、胎土は、あづき色を呈し、細かい。白砂がたくさん入っている。あづき色の砂も見える。小孔あり。よく焼き締まる。

00091は、褐釉陶器の壺口縁部の小片である。内折れ口縁の上端は茶褐色釉、体部外面と口縁内端は暗褐釉、体部内面は露胎もしくは褐色の下釉が観察される。釉は、茶褐色マットな下釉に褐色のマット釉がかかる。また、胎土は、褐味の灰色を呈し、中に白色や黒色の小砂がたくさん混じる。多孔質である。

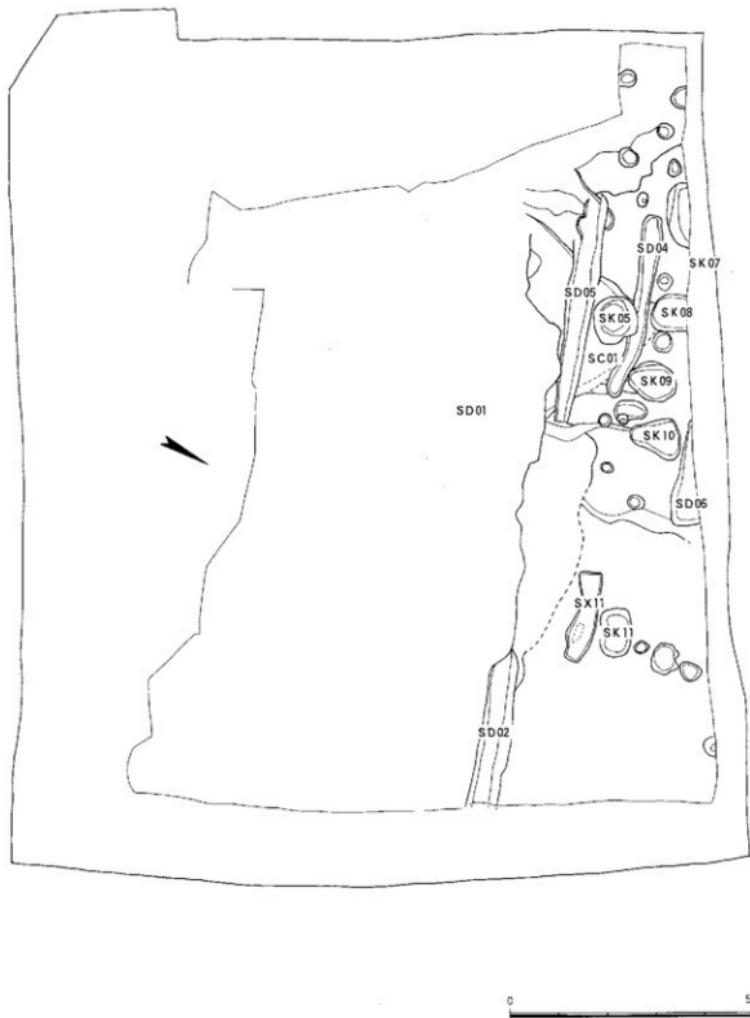


Fig.22 第3次調査区全体図②(下面、1/100)

第6層出土遺物(Fig.21)

00122は、国産綠釉陶器である。釉は、黄緑を呈し、ベンキを塗ったような光沢をもつ。釉は、高台裏にも掛かっており、非常にうすい。胎土は、白っぽい黄色を呈し、中に1mmくらいの黒粒が多く混じる。陶質である。調整は、内外面ともにヘラミガキのようだ。底部径7.2cmを測る。京都産か。

S D03 (Fig. 4)

調査区の東側隅で検出された東西に走る溝状遺構で、西側では立ち上がる。延長3m以上、幅0.8m、深さ0.3mを測る。埋土からは遺物は出土していない。直線的で、明らかに立ち上がる形状から施設の区画などの機能をもったものか。

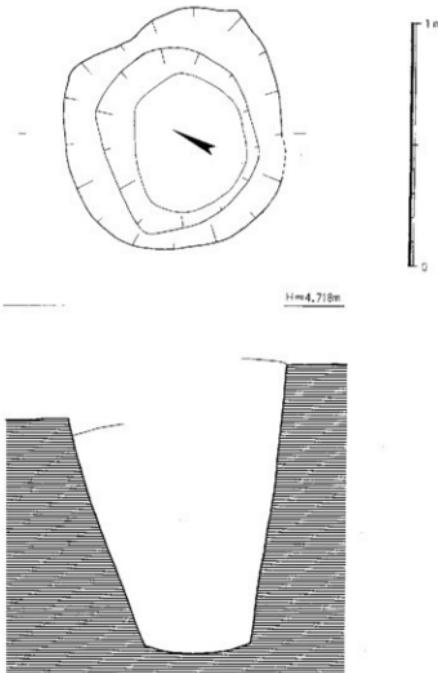


Fig.23 SK05出土状況実測図 (1/20)

② 下面検出の遺構

下面で検出された遺構は、土坑6基(S K05, 07, 08, 09, 10, 11)、溝4条(S D02, 04, 05, 06)、墳墓S X01)、住居跡1棟(S C01)、柱穴などである。

・土坑(Fig.22~31)

S K05(Fig.23, 24)

調査区北側の西端近くで検出された円形土坑である。規模は、長辺長0.95m、短辺長0.9m、深さ1.2mを測る。壁は直線的に外に開き、底部もほぼ平坦な竪穴である。性格は、不詳である。埋土内から青磁器碗、白磁器碗、陶器長胴壺、土師器皿などが出土した。

出土遺物(Fig.24)

00157は、土師器皿である。中型サイズの皿で、器色は内外面ともに淡い褐色を呈し、調整はナデもしくは横ナデである。底部は丸みを帯びており、板目痕が認められる。胎土は密である。また、焼成は堅緻である。口径15cmを測る。

00158は、白磁器碗の口縁部である。内済気味に聞く口縁を有し、釉は、透明な黄味のものを全体に薄く掛ける。内外面ともに細かい貫入が見られる。胎土は、淡い褐色を呈する。口径15.8cm。

00159は、青磁器碗である。口縁の端部は両取りをしている。また、体部内面には2条の並行する沈線を施す。釉は、浅い緑色の透明釉をうすく掛ける。器面の貫入は網目状となっている。胎土は、白色を呈し、精良である。口径18.2cmを測る。

00160は、白磁器碗の底部破片である。高台は踏ん張るようにやや聞く。釉は、薄い緑色釉を内面と外面の途中まで薄く掛ける。他は露胎となる。高台外側には削り残した胎が見られる。外底には旨跡が残る。内面は剥落している。底部径は6.2cmを測る。

00161は、陶器の長胴壺か。外面は器色が暗褐色、内面は黒褐色を呈する。調整は内外面ともに横ナデを施す。高台は外側に踏ん張るように聞く。胎土に、砂の混入は多く、焼成は堅緻である。底部径は9.6cmを測る。

S K07・08(Fig.26)

S K07は、調査区の西側壁近くに検出された隅丸長方形の土坑で、約半分しか調査できなかった。

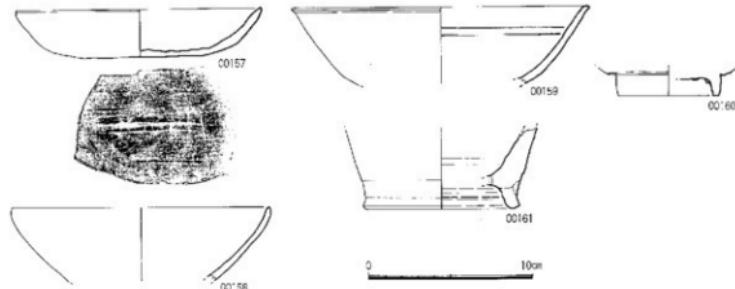


Fig. 24 SK05出土遺物実測図 (1/3)

規模は、長辺長1.3m、短辺0.5m以上、深さ0.8mを測る。埋土より遺物の出土はなかった。

SK08は、07の東側の壁に隣接して検出された。規模は、長辺0.75m以上、短辺0.8m、深さ0.2mを測る。埋土から遺物の出土はなかった。

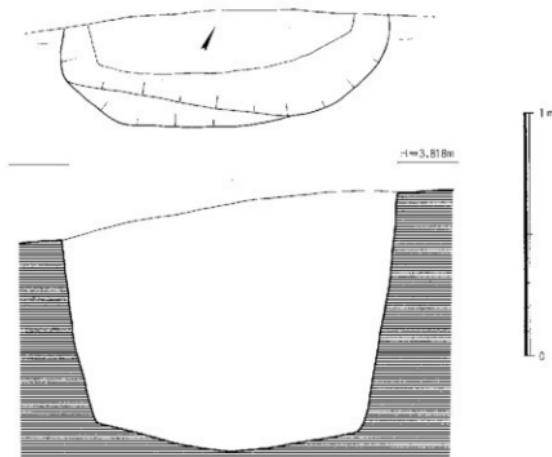


Fig.25 SK07出土状況実測図 (1/20)

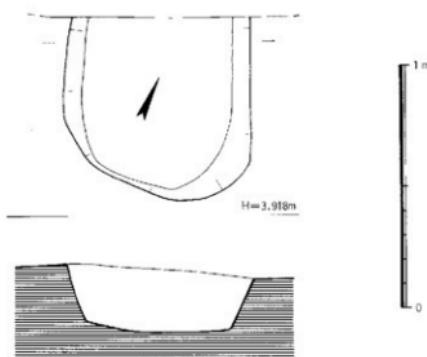


Fig.26 SK08出土状況実測図 (1/20)

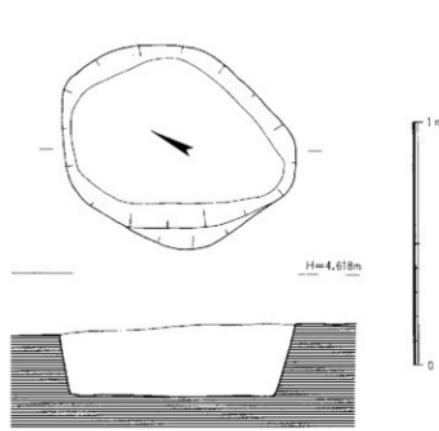


Fig. 27 SK09出土状況実測図 (1/20)

S K09 (Fig. 27, 28)

S K09は、調査区北側端のほぼ中央に検出された長円形の土坑である。長辺1m、短辺0.8m、深さ0.3m規模の土坑である。出土遺物の量はそれほど多くない。

出土遺物 (Fig. 28)

00165は、黒釉陶器の壺である。綺まった口縁から大きく膨らむ胴を有する。外面には線描きが見られる。釉は内外面ともに均一にかかっている。口縁に一部釉が垂れているところがある。胎土は、セピア色を呈し、中に黑色石粒をかなり含む。頸部径11cmを測る。

00166は、青磁器碗である。全体に器壁の厚い製品である。口縁の縁部を緩くひきだす。釉は、透明な淡い緑色

の釉を厚く掛ける。内外面ともに貫入がいちじるしい。体部外面には横掛け文、内面には片刃彫を施す。

00167は、青磁器碗の底鉢破片である。内面には圓線が多く見られる。釉は、内面が淡い緑～黄緑色、外面が黄緑釉を掛ける。高台は分厚く、外面の一部に釉が垂れる。底部径6.6cmを測る。

00168は、高台の低い白磁器碗である。内面の見込に圓線が1条ある。高台と体部との境はケズリ痕跡が残る。体部外面の途中と内面は露胎となる。釉は、やや褐色味を帯びた透明のものである。底部径は6.6cmを測る。

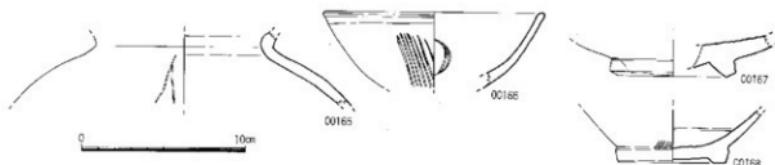


Fig. 28 SK09出土遺物実測図 (1/3)

SK10(Fig.29,30)

SK10は、SK09の東側に隣接して検出された。土坑は、平面形が羽子板状となる。長辺長は、1m、短辺0.9m、深さ0.3mを測る。埋土からはそれほど多くの遺物は出土していない。

出土遺物(Fig.29)

00170は、白磁器鏡である。口縁部が、玉縁をなす。全体にうすい造りで底部を失う。釉は、やや褐色を帯びた透明釉を全体にうすく掛ける。また、全体に細かい貫入がみられる。胎土は、灰味を帯びた白色を呈し、稍良である。口径15cmを測る。

00169は、土師器の小皿である。浅く、全体に分厚い造りである。外面は横ナデ、内面は回転ナデを施す。底部は、板目痕を残す。器色は、内外面ともに淡い褐色を呈する。胎土は、密である。また、焼成も堅緻である。口径9.8cm、高さ1.2cm、底部径7cmを測る。

SK11(Fig.31)

SK11は、調査区東側の北端でSK01の北側に隣接して検出された。形状は、隅丸長方形をなす小型の土坑である。規模は、長辺長が1m、短辺長0.6m、深さ0.4mを測る。埋土からは図化が可能な遺物は出土していない。

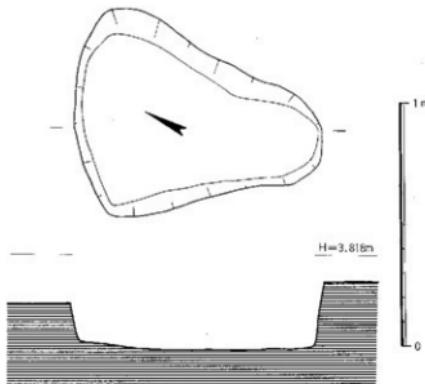


Fig.29 SK10出土状況実測図 (1/20)

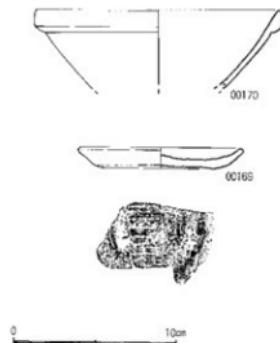


Fig.30 SK10出土遺物実測図 (1/3)

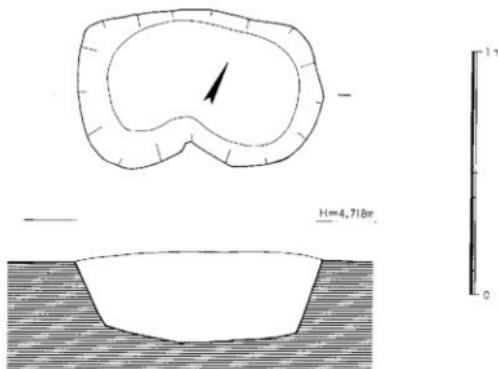


Fig.31 SK11出土状況実測図 (1/20)

・溝 (Fig.32~34)

S D02 (Fig.32)

S D02は、調査区東端で検出された東西溝である。方向からすると西侧のS D05と連絡する可能性も高いかも知れない。現在の延長は3m、幅0.6m、深さ0.4mを残している。埋土から出土した遺物類は多くない。

出土遺物 (Fig.32)

00177は、須恵器の杯蓋である。口縁端部の返りも小さく、嘴状にとがる。器色は、内外面ともに淡い灰色を呈する。天井部は丁寧なヘラケズリが残る。胎土は密である。また、焼成は堅緻である。口径11.4cm、高さ2.2cm以上を測る。

00178は、白磁器碗の口縁部小破片である。体部外面に柳描き文を施す。また、体部内面には2条の巻線を巡らせる。釉は、やや淡い灰色の透明釉を全面に薄く掛ける。全体に薄い造りとなっている。

00179は、白磁器碗の口縁部破片である。端部は面取りを行っており、口ハゲとなる。内外面ともに淡い乳灰色の釉を薄く掛ける。口径は不明である。

00180は、白磁器の小型杯となる。底部を欠くが口端部を外方に引き出しており、外面に強い稜をもっている。釉は、淡い黄灰色の釉を内外面ともに薄くかける。また、器面には全体に細かい貫入が見られる。口径は2.5cmを測る。

00181は、中型の土師皿である。底部は糸切離しとなる。器色は淡い褐色を呈し、内外面ともに横ナデを施す。胎土は密である。焼成は堅緻である。口径15cmを測る。

00182は、内黒土師器の椀である。内面は漆黒色で、横方向のヘラミガキが頗著に残る。外面は横ナデがみえる。外面下半部は暗褐色を呈する。口径14.8cmを測る。

00183は、土師器の小皿である。底部は糸切離しとなる。器色は、全体的に暗褐色を呈する。口縁の立上りも低く、1cmに満たない。口径7.4cm、高さ0.9cmを測る。胎土は密である。焼成は堅緻である。

00184は、土師器の小皿である。同様に底部は糸切離しである。内外面ともに器色は暗褐色を呈し、

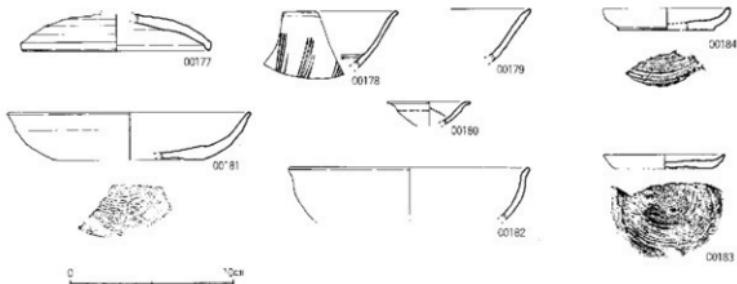


Fig.32 SD02出土遺物実測図 (1/3)

調整はいずれも横ナデである。胎土は、密である。焼成も堅緻である。底部径5.8cm、器高1.4cmを測る。

S D04 (Fig.33)

S D04は、調査区の西北隅に検出された東西溝である。規模は、全長3.8m、幅0.3~0.4m、深さ0.3m程度のもので、両端はいずれも立ち上がる。南側に隣接並行してS D05が走る。

出土遺物は少量である。

出土遺物 (Fig.33)

00185は、須恵器壺の口縁部破片である。小型の器で、器壁が非常に厚い。器色は内外面ともに暗灰色を呈し、調整は内外面ともに横ナデを施す。胎土に粗砂を混入する。焼成は堅緻である。口径14.4cmを測る。

S D05 (Fig.33)

S D05は、調査区の西北隅に検出された東西溝である。東側の延長上にあるS D02と連絡する可能性が高い。現存する規模は、全長4.7m、幅0.4~0.6m、深さ0.2mで、直線的に延びる。埋土から少量の遺物が出土した。

出土遺物 (Fig.33)

00186は、平瓦破片である。厚さ2cm弱で一端を残す。外面は粗い格子目の叩きを加えたの後にへらで大半をナデ消す。内面は、粗い布目の痕跡があり、経緯は1cm四方に5×5本程度のものである。

00187は、須恵器高台杯である。口縁端部を欠いている。杯部は直線的に立上り、高台も低く外側に踏ん張っている。器色は、暗灰色を呈し、器面調整は横ナデである。胎土は、密である。焼成も堅緻である。底部径7.6cmを測る。

00188は、土師器壺の底部破片である。内外面ともに器面の荒れがはげしい。器色は、暗褐色を呈し、外底部に墨書の痕跡が見られる。高台は細く、ほぼ直立する。胎土は、密である。焼成も堅緻である。底部径10cmを測る。

00189は、土師質の高台付き土器である。高台は、低く外側に踏ん張った形状となる。器壁は1cmに近く、非常に堅く焼け縮まっている。器色は、外面が赤褐色~淡い赤褐色、内面は黄褐色を呈する。調整は、内面に横ナデが残る。胎土には石英の粗砂の混入が多い。底部径は、12.4cmを測る。

S D06 (Fig.34)

S D06は、調査区北端の中央に一部が調査された。現存の規模は、長辺2.2m、短辺0.5m以上、深さ0.5m程度であるが、端部が立ち上がっている気配があり、土坑となる可能性もある。埋土内から

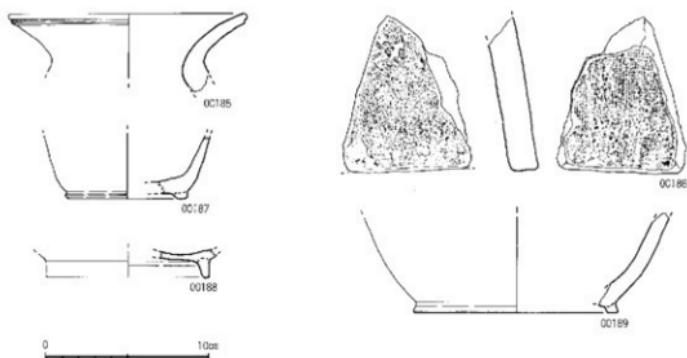


Fig.33 SD04, 05出土遺物実測図 (1/3)

は比較的まとまった遺物が出土している。

出土遺物 (Fig. 34)

00107は、青白磁器袋物の頭部小破片である。外面下端に把手の痕跡が見られる。釉は、青みを帯びた透明な釉である。器面には細かい氷裂が見られる。胎土は、灰味の白色を呈し、中には黒い粉のような粒子が少々混じる。口径10cmを測る。

00097は、白磁器碗底部破片である。高台の外面には細かいロクロ目、内側はロクロ目が小さな段をなす。釉は、青緑を帯びた透明な釉である。光沢がある。かすかに氷裂が入る。また、胎土は、褐味の黄白色を呈し、やや粗である。底部径5.2cmを測る。

00098は、白磁器碗II類相当の碗である。高台と底部外面には細かいロクロ目が段となってついている。釉は、少し柔った無色の透明釉である。釉下に灰色を呈する部分があり化粧と考えられる。外底に墨書の痕跡があるが、字は不明。

00099は、白磁器碗II類相当の碗である。高台は低く、外側に開く。釉は、外面オリーブ味の透明釉である。氷裂あり。また、内面は色が白っぽい。釉尻にオレンジ色のシブが出る。胎土は、薄い灰色～肌色を呈し、中に黒点が少々入る。底部径4.9cmを測る。

00100は、白磁器碗V類相当の碗である。底部は分厚い。釉は、かすかに青みのある透明釉である。光沢がある。氷裂はみられない。胎土は、白色を呈し、精良である。磁化している。底部径は、6.8cmを測る。

00101は、白磁器碗V類相当の碗である。外面に狙いケズリが顕著である。釉は、灰味のある乳白色の釉である。薄いところは透明となる。表面に褐色のクロゴマが浮く。胎土は、灰白色を呈し、精良である。中に褐色砂が混じる。磁質。口径15.4cmを測る。

00102は、白磁器碗VI類相当の碗である。口縁は、玉縁をなす。釉は、オリーブ味を帯びる透明な釉である。氷裂はない。光沢がある。また、胎土は、灰白色を呈し、熔融がすんでいる。口径は、15.6cmを測る。

00103は、小さい玉縁口縁をもつ白磁器碗II類相当の碗である。全面に施釉する。釉は、灰味の透明な釉である。こまかい氷裂が見られる。胎土は、灰白色を呈し、中に粉のような黒点を含む。口径は、14cmを測る。

00104は、白磁器碗V類相当の碗である。内底の見込との境は圓線となる。釉は、透明な釉である。

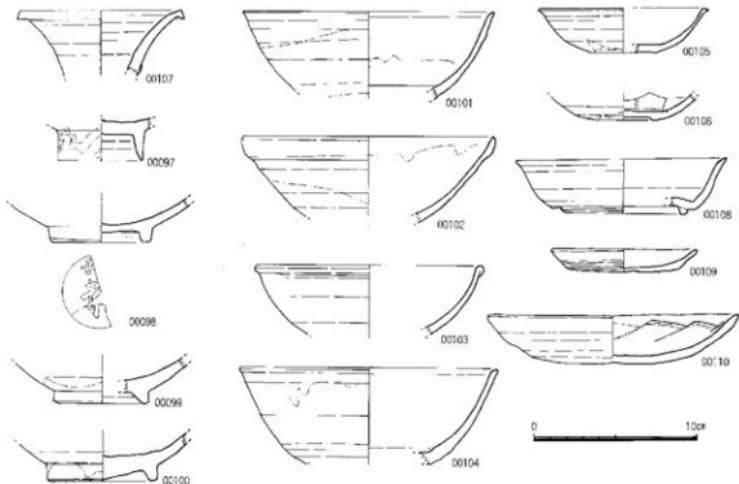


Fig. 34 SD06出土遺物実測図 (1/3)

厚く溜った釉ダレの部分では白湯が少し出ている。胎土は、白色を呈し、精良である。磁化している。口径15.8cmを測る。

00105は、白磁器皿である。外面にはロクロ目か。稜をなす。釉は、肌色の釉である。水裂に灰色がしみている。厚く片寄る所では不透明となる。また、胎土は、明るい肌色を呈し、混じりはない。柔らかい感じをあたえる。口径10.6cm、底部径4cm、高さ2.75cmを測る。

00106は、白磁器皿である。内面に白堆線が5~6本入り、花形をつくる。釉は、透明な釉である。水裂なし。外面に小さなピンホールあり。胎土は、白色を呈し、精良である。磁質となる。底部径は、3.4cmを測る。

00108は、須恵器高台杯である。焼成時のゆがみあり。高台は低いが杯底部端より内側に付けられている。胎土は、暗灰色を呈し、きめ細かく、白い砂を含む。口径13cm、底部径7.7cm、高さ3.35cmと考えられる。

00109は、土師器小皿である。底部付近細かいロクロ目が残る。底部は、糸切りと思われ、板目圧痕が残る。胎土は、黄褐色のきめ細かいもので、白砂を含む。微小な金雲母が入る。口径9cm、底部径6.8cm、高さ1.4cmを測る。

00110は、土師器杯である。外面はナデで、内面はヘラでなで上げている。胎土は、薄い黄褐色を呈し、きめ細かく、白、褐色の小砂を含む。口径15.6cm、高さ3cmを測る。

・ 墳墓 (Fig.35)

S X01 (Fig.35)

S X01は、調査区北東隅の土坑S K11の南側に隣接して検出された。不整な長方形を呈し、規模は

長辺長が1.9m、短辺が0.4~0.5m、深さ0.1m程度である。西側の小口はしっかりとしているが、東側では緩い。東側に片寄って骨片の集積が見られるが、部位を特定できない。人骨と考えられる。坑内から副葬と考えられる遺物は出土していない。

・住居跡 (Fig.36,37)

S C01 (Fig.36,37)

調査区北端の中央部近くで検出された竪穴住居跡である。本遺構は、基盤層の黄褐色細砂の上面で検出されたが、壁の二辺が確認され、やや西壁にちかく見つかったかと考えられる焼土痕跡以外は支柱穴も明らかでない。現存する部分で復元すると北壁が2.9m以上、西壁が3.5m以上、深さが0.3m以上となる。後代の遺構による破壊を十分にうけている。埋土からの遺物の出土は多くない。

出土遺物 (Fig.37)

00171は、土師器器台の脚部破片である。外側に開く直線的な脚は端部でやや尖る。器色は、外面が暗褐色を呈し、内面はやや暗く黒褐色を呈する。器面調整は、外面が荒いタテ刷毛目、内面が横刷毛目を施す。端部は横ナデである。胎土は、密である。焼成は堅微である。底部径13cmを測る。

00172は、器台の脚部破片である。外面は荒いタテ刷毛目調整後に縦方向の丁寧なヘラナデを施す。内面も丁寧なヘラナデを施す。器色は、淡い褐色を呈する。胎土は非常に密である。焼成は非常に堅微である。

00173は、口縁が緩く外方にひろがる甕である。頸部以下には煤が全面に付着する。器面調整は口唇部以下がタテ方向の刷毛目調整後に口縁付近を横ナデを施す。また内面は口縁部横刷毛目でこれ以下の胴部はタテ方向の刷毛目調整である。胎土には粗砂の混入が多く、焼成は堅微である。口径26cmを測る。

00174は、高杯の脚部破片である。器色は、外面で淡い褐色、内面が赤褐色を呈する。器面調整は、外面が細かいタテ刷毛目後に平行沈線状の暗文を施し、この後に横ナデを加える。内面は横ナデ後に

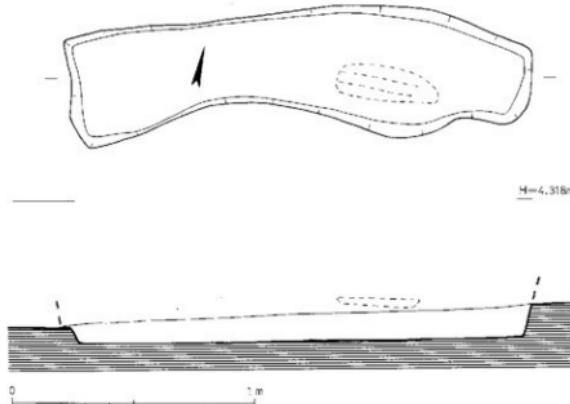
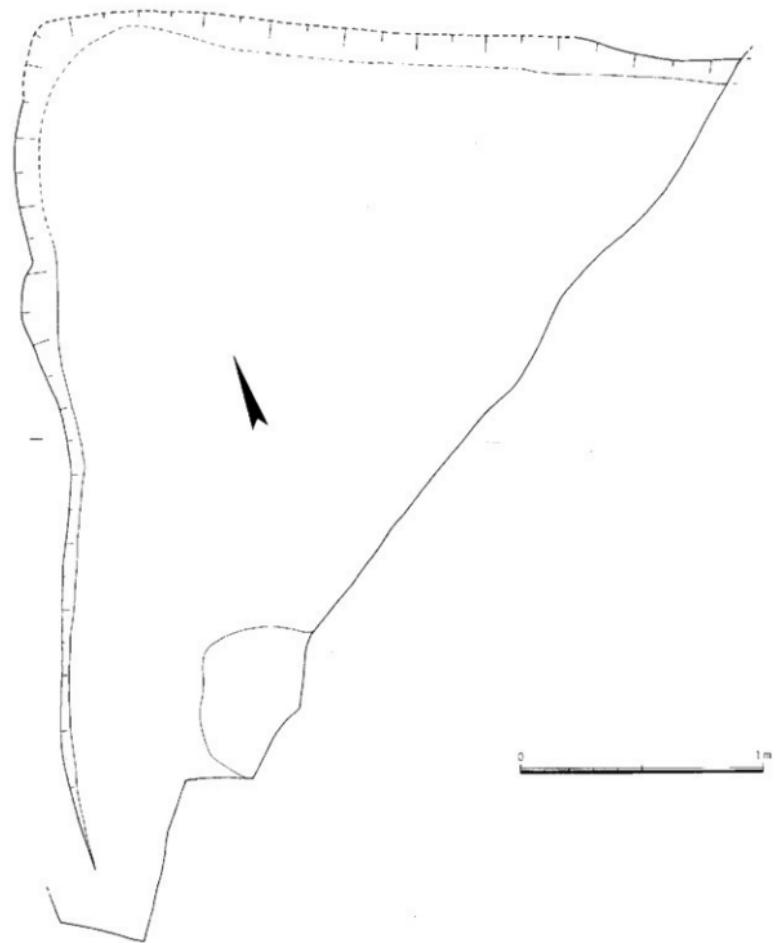


Fig.35 SX01出土状況実測図 (1/20)



H=3.318m



Fig.36 SC01出土状況実測図 (1/20)

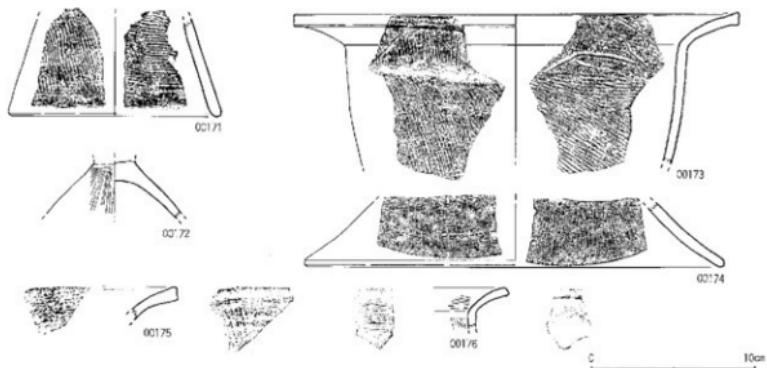


Fig. 37 SC01出土遺物実測図 (1/3)

平行沈線様の暗文を施す。胎土は、密である。焼成も堅緻である。底部径25cmを測る。

00175は、甕口縁部破片である。器色は、外面暗褐色、内面暗赤褐色を呈する。器面調整は、口唇部横ナデで、外面は荒いタテ刷毛目調整後に横ナデ、内面は荒い横刷毛目調整を施す。胎土に荒い砂の混入が多い。焼成は堅緻である。

00176も甕口縁部破片である。器色は、内外面ともに暗褐色を呈する。器面調整は、外面横ナデで、内面は口縁が荒い横刷毛目で、これ以下がタテ刷毛目を施す。胎土は、密である。焼成も堅緻である。

・柱穴

建物の柱穴と考えられる小穴は、調査区の北側地山面より23個検出されたが、いずれも径が0.2~0.4mを測るもので遺構としてまとまりを認めることはできなかった。

・表土層出土遺物 (Fig. 38)

00087は、白磁器碗II類相当の碗である。口縁の端部に6個所ほどの切り込みを入れ、その下の体部に白堆線を入れ、花形になしている。釉は、灰黄色の透明釉で、細かい氷裂は入る。施釉前に内面および外面部の中位以上に白化粧をする。釉は、高台付近まで掛かるが、釉尻にオレンジがかかったシブがついている。胎土は、灰味を帯びた黄白色を呈し、やや粗である。口径17.6cm、底部径6.2cm、高さ6.25cmを測る。

00088は、白磁器碗II類相当の碗である。口唇に刻みを入れ、その下の体部に白堆線を入れる。釉は、黄~灰味の透明釉である。細かい氷裂がある。胎土は、灰色を呈し、精良である。化粧はない。口径16.75cm、底部径6.6cm、高さ6.3cmを測る。

00089は、白磁器碗V類相当の碗である。釉は、オリーブ味の透明な釉である。氷裂はみとめられない。外面にビンホールが少々見られる。胎土は、薄い灰色を呈し、やや粗である。なかに白い小砂、

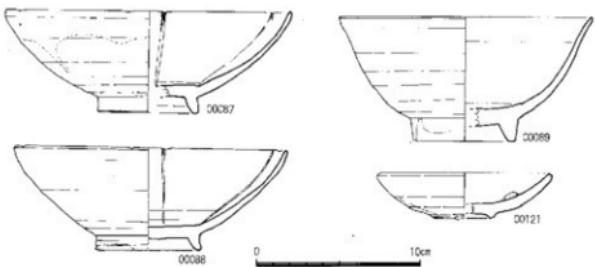


Fig.38 表土層出土遺物実測図 (1/3)

黒い小砂が少し入っている。口径15.6cm、底部径6.2cm、高さ7.6cmを測る。

00121は、瀬戸灰釉皿である。釉は外面の途中までかけてある。底部外面は露胎となる。また、見込に2個所、豊付きに1個所の目跡が見られる。釉は、オリーブグリーンで粘りがあるようである。透明度は高い。胎土は、褐色がかかった灰色を呈し、中に1mm大の濃褐色粒が少量混じる。口径10.8cm、高さ3cmを測る。

第四章 おわりに

以上、博多遺跡群第3次調査の成果について述べてきた。

発掘調査からすでに17年以上が過ぎ去り、当時の調査法は現在の博多市街の遺跡調査方法と比較すると明らかに差のある調査方法であった。

つまり、一般的密度濃い集落遺跡と比べてもまったく比較にならないほど博多遺跡群での遺構の重複は著しく、現在でも同一時期の文化面検出には困難がともなうところであるが、当時はさらに手さぐりの状況であり、この調査以降くらいから盛んとなつた輸入陶磁器の研究も緒についたばかりであった。

今回調査で報告した上面、下面の区別も厳密絶対的なものではなく、東西溝S D01の北側縁線が検出された面を上面としているにすぎない。当時の調査技術では現在の方法で見つかっている5面、7面といった多数の文化層検出は寧ろ驚異といえよう。

調査報告のまとめとしては勉強不足のためにほとんど書くべき内容を見出しえないが、最低事実の報告は必要と考え、殆ど当時の実測図と野帳のみで報告を作成した。調査日誌などの散逸が一番報告書作にあたって困難な条件となった。

図 版

P L A T E S



1. 上面遺構検出状況（南より）



2. 上面遺構検出状況（南より）、一部に基盤白色砂層露出



1. 上面遺構検出状況（南より）



2. 上面遺構検出状況（南より）、白色はSD01の北壁



1. 上面遺構検出状況（西より）



2. 上面遺構検出状況（東より）



1. SD01西側土層断面（東より）



2. 上面SD01内作業風景（南より）



1. 下面遺構検出状況（南より）



2. 下面遺構全景（西より）



1. SD01構検出状況（東より）



2. SD01土層堆積状況（東より）



1. 調査区北壁西側土層断面（南より）



2. 調査区北壁東側土層断面（南より）



1. 調査区下面遺構検出状況（東より）



2. SK05出土状況（東より）



1. SK03、04出土状況（北より）



2. SK04出土状況（西より）



1. SK05、08、09出土状況（北より）



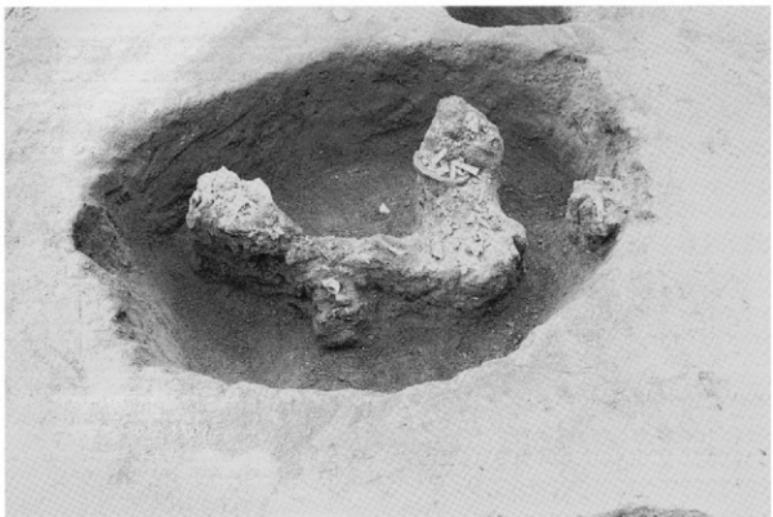
2. SK04出土状況（東より）



1. SX01(下面) 出土状況 (西より)



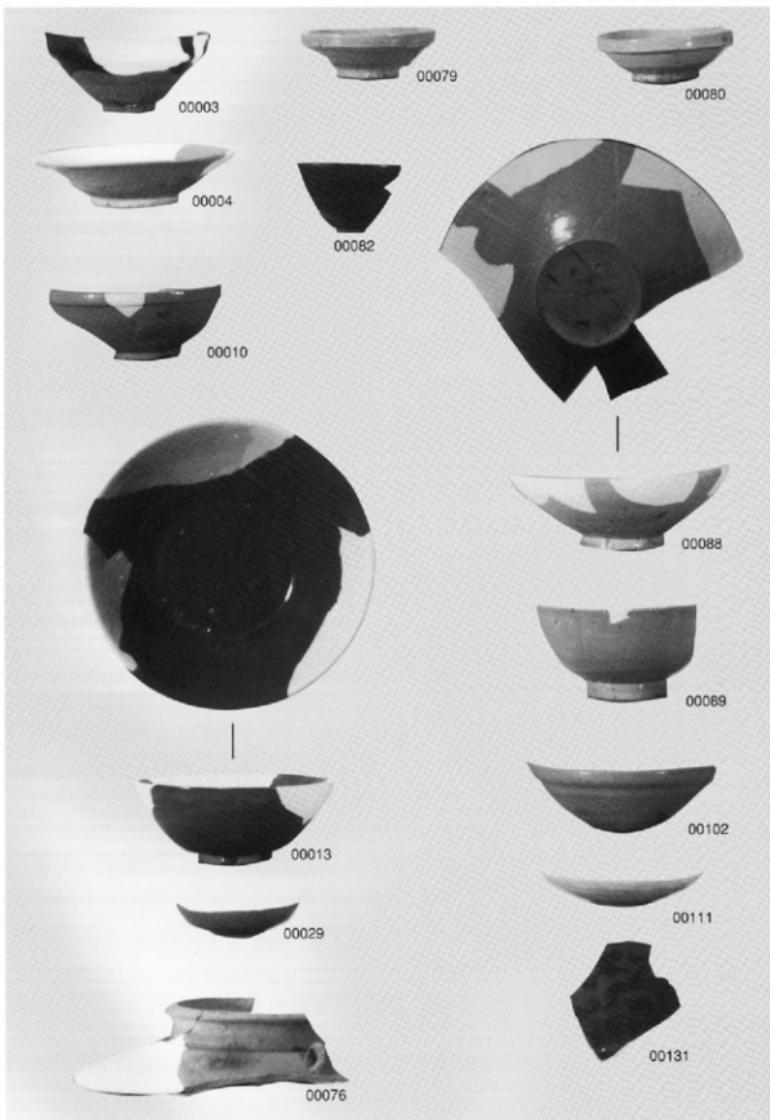
2. SX01内人骨遺存状況 (北より)



1. SK09出土状況(南より)



2. SK09馬歯出土状況(東より)



博多遺跡群第3次調査出土遺物①



00027

00028

博多遺跡群第3次調査

—万行寺納骨堂建設にともなう発掘調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第515集

1997年3月31日

発 行 福岡市教育委員会 万行寺遺跡調査会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 久野印刷株式会社

福岡市中央区天神5-5-8

TEL 092-741-0637

